
ヤミに蠢く

神田原ユビ足

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤミに蠢く

【Nコード】

N9533G

【作者名】

神田原ユビ足

【あらすじ】

毎日を漠然と生きる寿幸は、インターネットの掲示板で見つけたアダルトビデオの男優のアルバイトに応募する。だが、「男優なんて誰でもできる」と小ばかにしていた彼が直面したのは、極度の緊張の中で何も出来ないという現実と、惨めな敗北感だった。くだらない仕事だと軽んじていた自分を恥じ、控え室でへこんでいた寿幸は、そこで玄と名乗るベテランの男優と出会った――。

第一話（前書き）

アダルトビデオ業界に生きる人たちにスポットを当てた風変わりなお話ですが、性描写はほとんどありませんので非18禁として投稿させていただきました。

「職業に貴賤は無い」というテーマを、恋愛小説仕立てでまとめてみました。全16話＋α。

第一話

凍えるような冷気を纏った一陣の風がアスファルトの粉塵を巻き上げ、流れて行く。

その鋭利な刃物のような烈風は、落ち込んでいる寿幸の頬を冷たく撫でていった。

「はあ……」

真っ白い息を吐き出しながら寿幸は、先程から数えて優に20回目を超えるため息をついた。

上手く出来なかった――。

その事実が、寿幸の気持ちを容赦なく沈ませる。

今日は、以前からやりたいと切望していたとあるアルバイトの初出勤の日だった。

寿幸は、この仕事に現段階の自分の総てを懸けているといっても過言ではなかった。

元々あまりメジャーではない仕事だったから、求人誌などで情報が得られる類のものでもない。

探し回った拳句、やっとインターネットの掲示板で募集しているのを見つけたのだ。

だから、失敗したら次はないと思ってやらなければ。そう自分に強く言い聞かせていたはずなのに、まさかの失敗。

なんで勃起しなかったんだろう……。

駅から自宅のマンションまでの道を歩いている最中にも関わらず、

寿幸はそつと自分の股間に手を当ててみた。

せめて勃起さえすればなんとかなったかもしれないのに。それが悔やんでも悔やみきれない。

寿幸が熱く切望して、やつと決まったアルバイト。それは、汁男優だった。

アダルトビデオなどで、女優に精液をぶっかける役割を持つこの仕事の存在を初めて知った時、寿幸はこれこそまさに自分の天職に違いないと思った。

元々オナニーは大好きだったし、誰にも負けない自信があった。そのオナニーを生かしてお金がもらえるなんて、願ってもいないことだ。

だけど、甘かった――。

元来オナニーとは、誰かと競い合ったりするわけではなく、一人で部屋の中でするものだ。

例え寿幸が誰にも負けないと思ったところで、それこそ井の中の蛙、所詮は自分自身での評価でしかない。

今日寿幸は、周囲のベテラン汁男優たちのぶっかけを見て、自分のオナニーがあまりにも拙い子供じみたものであることを知った。

撮影現場に入ったときから、寿幸は緊張しっぱなしだった。

自分が初めて踏み入る未知の領域。

高価そうな撮影機材の数々も物珍しかったし、何よりもやはり、大勢のスタッフに囲まれた中で平然と裸体を晒している女優の姿は異様としか思えなかった。

「じゃあ、汁男優の皆さんはスタンバイしてください。1人2回ぶっかけをお願いします」

スタッフの1人からそんな指示が飛び、自分と同じアルバイトの汁男優たちが女優の周りを取り囲むようにずらりと並ぶ。

寿幸も慌ててそれに倣い、その十数人ほどの円の中に加わった。

他の汁男優たちは寿幸のように若い者は少なく、大半が中年の男性だった。

そのため、むんとした加齢臭が寿幸の鼻を刺激する。

それに、事前にパンツ1枚の姿になるように指示されていたため、狭いスタジオで円を作ると他の男と肌が密着してしまい、寿幸は萎えてしまいそうになる気持ち堪えるのに必死だった。

耳を澄ますと、周りからはあはあと獣じみた息遣いが聞こえてくる。まだカメラは回っていないのだが、既に臨戦態勢に入り、パンツの中に手を入れて性器をしごき始めているものがあるのだ。

女優の裸体を前によほど我慢が出来ないのか、それともこの仕事のベテランか、どっちにしろ寿幸は、こんな状況ですぐにそんなことをやり始められるその度胸に驚いてしまった。

自分もそうしなければいけないのかもしれないが、触れてみるまでもなく自分の性器がまるで勃起していないことに寿幸は気づいていた。

大体、そもそもの指示が寿幸にとっては驚きだった。

1人2回ぶっかけ――。

当然のように放たれたこの言葉が、寿幸の自信を一気に奪っていった。

友人たちとの雑談の中で時たま交わす、オナニーについての話題。寿幸が1日に6、7回もしたという、友人たちはみな一様に驚いたものだ。

そんな寿幸ですら、続けざまに2回も射精する経験はほとんどなか

った。

射精したあとにすぐにしごく、まるで性器が筋肉痛にでもなったかのように痛いのだ。

以前友人にこのことを言うと、彼らもそうなると言っていたから、寿幸の性器にだけ起きる現象ではないのだろう。

なのに、2回ぶっかけ。しかもこんな状況で、だ。

初めてこの仕事に参加するのは自分だけなのだろうか。

2回という指示を受けても、驚いている素振りを見せているものは誰もいなかった。

その事実が一層、寿幸の気持ちを沈ませる。

この中で俺は、一番ダメなのかもしれない――。

そう考えると、汁男優として食っていかうと思っていたことや、すぐにトップに上り詰められると思っていた自分の考えの甘さが恥ずかしくなってしまう、余計射精どころではなくなってしまう。

パンツの中の性器は、以前として萎えたままだった。

「それじゃ、本番行きます！ カメラ回るんで、射精し次第ぶっかけてください！ 声は出さないようお願いします！ よろしく！」

寿幸がそんなことを考えている間にも時間は流れ、監督の声と共についに撮影が始まってしまった。

事前からしごいていた男たちの数人は、開始の声と同時にすぐに女優に精液をかけ始める。

し、白い――！！

寿幸は思わず叫びそうになった。

白いのだ。精液がすさまじく白い。

一体、自分が普段出している液体は何なんだろうかと思うほど白い。それに、触ってもいないのに粘り気のすごいのが分かる。

まるでゼリーのような純白のその液体は、色白の女優の肌にかかっても高価な宝石のように美しく映えた。

あそこに自分の透明に近い色の精液がかかっても、カメラ越しだとほとんど何も見えないんじゃないのか……？

甘かった。何もかもが全て甘かった。

オナニーが好きだからといって、汁男優として食っていけると考えていたことも、射精するだけなんだから特に何の前準備も知識も必要ないと思っていたことも。

恐らく彼らは、撮影前の数日間のオナニーの禁止、そんなことは当たり前前のようにこなしているのだろう。

それに加え、精液の質を良くする為の栄養バランスを考えた食事、また射精の飛距離を伸ばすための筋トレ、その他徹底した体調管理を行っているに違いない。

そんなことも知らずに何の根拠も無い自信だけでトップに上り詰められるなどと勝手に考えていた自分の愚かしさに、心底腹が立った。

俺はきつと、汁男優という仕事を舐めていたんじゃないか——？

自分の一生の天職にしたい、そう考えていたくせにその実その仕事のことを心の中では舐め切っていたのだ。

所詮、誰でも出来る。だから俺ならばトップに立てる。そんな風に考えて。

なんという志の小ささだろう。吐き気がする思いだった。

けれど、今はそんな反省は後回しにしなければいけない。

ともかくにも、自分は今、この場に汁男優として立っているのだ。考えの甘さは認める。だけど、せっかく与えられたチャンスはやは

り最大限に生かさなければならぬ。

大切なのは、今この場で射精することなのだ。

寿幸は気持ちを切り替えると、すーっと一つ大きく息を吸い込んだ。出来るだけ神経を目の前の女優に集中させ、その裸体を凝視する。大体、目の前にいるのは今売り出し中のアイドル女優じゃないか。自宅では、何回この子のDVDで抜いたか分からない。

そんな子に、今から精液を浴びせられる。友人や以前の自分が聞いたら、どんなにか羨ましがっただろう。

一ファンだった俺が、直接精液をかけられるのだ。こんな幸せがあるだろうか。

さあどこにかけよう。顔はもちろん本命だが、小ぶりの胸も捨てがたい。

いや、むちむちとした太もも中々魅力的じゃないだろうか。

だが待てよ。耳や肩など多少マニアックなところにかければ、監督の目にも留まりやすいかもしれない。

とすると……うむむむ。

そんなことを考えて目の前の女優を見つめながら、寿幸はただ一心不乱に自分の性器を刺激した。

ただひたすら――。

「はい、カットー！ もう十分だから、オッケーです！ 汁男優の人たちは、下がってください！」

スタッフの声が飛び、パンツ一丁の男たちがぞろぞろと一列に並んでスタジオから出て行く。

その最後尾について、うなだれながら寿幸は控えの部屋に戻っていた。

結局、最後まで一度も射精できなかった。いや、射精どころではない。勃起さえも出来なかったのだ。あまりにも不甲斐ない結果に、思わず涙が零れそうになる。

控え室に戻ると、着替えを済ませた男たちは報酬を受け取って次々と帰っていった。

射精1回5000円――。これが現在の汁男優に与えられる報酬の大体の相場だ。

今日は2回のぶっかけだから、1万円。ほとんどの男が、その額を支給されていた。

だが、寿幸に報酬はない。

射精の回数でカウントされるのだから、当然だろう。

それ以外には、一切何も支給されない。交通費はもちろん、ティッシュの一枚ですら。

大学の講義をさぼってきたのに、もらえたお金はゼロ、か……。

何やってんだろう自分は。

そんな想いが寿幸の頭の中を支配する。

だが、悪いのは全て自分だ。自分が上手く出来なかったからこんな結果を迎えることとなった。

だからこそ余計に情けなく、悔しかった。

すぐに帰る気にもなれず、控え室の椅子に座って呆然と天井を眺める。

なんで勃起しなかったんだろう……。

自分の甘さに反省してから、気持ちが悪く切り替えられなかったのだろうか。

それとも、場の雰囲気圧倒されていたのだろうか。

俺は所詮、その程度の人間だったということだろうか――。
と、その時だった。

「なんだ若いの、こんなところでしょげ返って」

もう誰もいなくなった控え室に入ってきた50歳くらいの男が、寿幸に声をかけてくる。

「まったく、もう誰もいやしねえ。分かてないやつが多いね。この仕事、営業が一番大事だっていうのになア」

呟くようにそう言うと、男は寿幸の真正面の椅子によっこらせと腰を下ろした。

「その点あんたは偉い、と思ったが、なんのこたアねえ。上手く出来なかったからって、気落ちしてるだけかい」

カカカ、と笑うと、「まアそんなこともあるわな。生きてりゃさ」と人懐っこい感じの顔で寿幸の目をじーっと覗き込んだ。

なんだか全てを見透かされたような気がして気恥ずかしくなった寿幸はそつと目を逸らし、「え、っと……どちら様ですか？」と男に尋ねる。

「俺かい？　俺は、玄でいいよ。玄さん、大体のやつはみんなそう呼ぶな」

そうじゃなくてスタッフの人なのかを聞きたかったんだけど……と思いつながら、寿幸はもう一度、玄と名乗ったその男の顔をよく見てみた。

ふと、その顔に見覚えがあるような気がしてくる。

記憶の糸を辿っていつて、そして寿幸は気づいた。
先程、見事なまでに白い精を放ち、寿幸を自信喪失に陥らせた人物。
他ならぬその男だった。

「あ……汁男優の方だったんですね。てっきりスタッフの人かと。
あ、見ましたよさっきの射精……。なんていうか、プロフェッショナルに徹してられるんですね」

少々興奮してしまい、思わず饒舌になる寿幸。
そんな寿幸をニヤニヤした顔で見つめながら、

「お前さんは、1回も出せてなかったみたいだけどな」

と、玄さんはからかうように言った。

「え、見てらしたんですか……？ あんなに大勢いて、みんな次々に射精してたのに……。すごいな」

「おいおい、それくらい把握してなきゃ汁男優はつとまらんぜ？
いいか若いの、ただ汁男優が好き放題ぶっかけてるだけじゃいい絵は撮れねーんだ。全体の流れを把握して、その瞬間もつとも映える場所に最適のタイミングで射精する。何も考えずに本能に従ってるだけじゃア、この業界ではやってけねえなア」

玄さんのその言葉を聞いて、寿幸はまたしても気分が沈んでしまう。
体調管理や準備を徹底しているだけじゃなくて、撮影中も常にそんなことを考えながら動いてるのか……。

もはや寿幸の自信は、喪失どころか次元の彼方に消え去ってしまったようだった。

しかし、その様子を見て玄さんはまた力力力と笑う。

「おい、若いの。顔を上げろよ」

「え？」

「いいんだよ、ハナっからそんな上手く出来なくてもよ。大事なのは、その反省する気持ちだ。考えることっつーかな。お前、さっき俺にプロフェッショナルに徹してるとかなんとか言っただよな」

「あ、はい」

「それ聞いて、俺はあんたには見所あると思ったぜ。何しろ、精液見ただけで体調管理だとか前準備のことなんかまで考えられるヤツなんてなかないねんだな。これが」

「そついう……ものなんですか？」

「そうだよ。大体のやつは、自分の欲を満たすことだけしか考えてねえ。結局、舐めてんだな。汁男優って仕事自体。まあせいぜい、射精に失敗しても金もらえずにふてくされるくらいだ」

「その気持ちも、もちろんありますけど」

「カカカ。まあそれも大事だ。金のために仕事するっていうのは、当たり前のことだからな。けど、その金に見合う仕事をしなきゃ、やっぱ俺は恥ずかしいって思うぜ。だからそうやって、なんでダメだったのか考えてるあんたは見所があるっつってんだよ」

「はあ……」

嬉しいような恥ずかしいような複雑な気分になって、寿幸は曖昧な返事をかえす。

「まあ、頑張りな。あんたにやる気さえあれば、またチャンスは巡ってくると思うからよ。次の現場でもしあつたら、その時はよろしくな」

「あ、はい。こちらこそよろしくお願いします」

「いいかい若いの、忘れるなよ。大切なのは、考える力だ。じゃあな」

そう言つて、玄さんは寿幸を残して控え室を出て行つた。

パタンと閉まつた扉を、寿幸はただ見つめる。

なんだか変わった人だったけど、他の大人たちにはない不思議な雰囲気があつたな……。

バッグを抱え、控え室を後にしながら、寿幸はそう思つた。

その玄さんの言葉が、帰途につく寿幸の頭の中で反芻された。なんで勃起しなかつたんだろう……。

そう考えては落ち込みながらも、玄さんというベテラン俳優に目をかけてもらえたことが寿幸の自信を少し回復させる。

マンションについてベッドに大の字に寝転んで、今日あつたことを思い浮かべてみた。

現場に行く前の、溢れていた自信。

本番中の、自信を喪失して反省心に苛まれていた自分。そして、玄さんの言葉――。

それらが全てないまぜとなつて、寿幸の頭の中をぐるぐると駆け回った。

ただ不思議なことに、憧れのアイドルだったAV女優——その裸体は、ただの一度も脳裏によぎることは無かった。

仕事に行く前の自分には、到底考えられない事態だっただろう。

だけど今の自分には、その理由はなんとなく分かる……。

「よし！」

ベッドから跳ね起きて、寿幸はパソコンを立ち上げた。

「大切なのは考える力」

ぐるぐると回っていた思考は、結局玄さんのその言葉に収束するこ
とで落ち着いた。

そうだ、調べて、考えて、準備しよう。次はもっと良い仕事ができるように。

「汁男優 募集」

検索サイトでキーワードを入力し、エンターキーをポンと押す。

こんなんでも立ち止まってられないよな。

そう自分に言い聞かせるうちに寿幸は、自分の中に潜む無限の可能性、その存在を確かに感じていた。

大丈夫。俺はやれる——。

第二話

自分のことを人形だと思え――。

この業界で生きていくための秘訣とされているその言葉が、美佳は大嫌いだった。

あたしは人形なんかじゃない。ちゃんと息を吸って、ご飯を食べて、生きている。

たとえ現実から逃避するためとはいえ、そのプライドさえも捨ててしまったら終わりだ。

それが美佳の信念だった。

だからこうして、全身に精液をかけられている時でもあたしは笑顔を絶やさない。

作り物の笑顔なんかじゃなくて、心からの本物の笑顔を。

美佳の周りを取り囲んだ男たちは、次々に白濁の液をその色白の体にかけていった。

顔や胸、太ももは言うまでもなく、髪の毛までもが不特定多数の男の精液で汚されていく。

けれど美佳は、一瞬たりとも嫌そうな素振りをすることはなかった。精液をかけ終えた男に向けられる笑顔は、まるで天使のそれを思わせた。

嫌じゃない。嫌なんて気持ち、あるはずがない。

あたしは今、思いつき楽しんでる。

この場で、大勢の男から精液をかけられることを。AV女優という仕事を。

あたしは他の子とは違う。借金のカタで売られたり、スカウトされ

てなんとなくだった。

そんなんだから、自分のことを人形だと信じ込ませたりしなきゃや
っていけないるんだ。

あたしは違う。あたしは、自分の意志でここにいる。だから嫌なん
て気持ち、あるはずない。

毎日呪文のように呟く言葉を、美佳は心の中で反芻した。

自分の意志で決めた道――。

それが今の美佳を支える全てだった。

文学少女になりたかった。

中学2年生の時、気まぐれで訪れた学校の図書室でふと見かけた「
人間失格」というタイトルの本。

作者の太宰治という人物の名前を、この時美佳は初めて知った。

生まれてこの方勉強なんてしたことがなかったし、教科書さえもま
ともに読んだことが無かった。

だけど、その「人間失格」というタイトルにはなんとなく興味を引
かれた。

今の美佳の、自分自身への気持ちにそっくりだったからかもしれない。
い。

無意識のうちにそれを手に取ると、万引きでもするかのようにこそ
こそと図書館を出た。

本を読むなんてことがバレたら、友達から笑いものにされるのは目
に見えていたから。

難しい漢字や分かりにくい言い回しが多かったが、数日かけて美佳
はそれを読み終えた。

同じ人間失格は失格でも、美佳とは生まれた環境から何からが違すぎていて、正直あまり共感することは出来なかった。

冒頭、主人公の幼い頃の写真が出てくるシーンから物語は始まるのだが、そもそも美佳は親に写真を撮ってもらったことすらない。

だけど、そんなタイトルで本を書く人がいるということに美佳はなんだか嬉しくなってしまった。

またこっそりと図書館に入り、今度は太宰の短編集を借りた。

「走れメロス」は小学生の時に授業でビデオを見せられたことをなんとなく覚えている。

この人が書いた話だったのか。人間失格とは打って変わった前向きなテーマに、美佳は少し驚いた。

そしてそれと共に、また少し太宰に親近感を抱いた。

それから、太宰に限らず色々な作家の本を読んだ。

いつの間にかもう、友達の目も気にならなくなっていた。

大体、本当の意味での友達なんて、そんなもの最初からいた試しがなかったのだから。

そうしていくうちに美佳は、「中学を出たら働くんだろうなあ」と漠然と考えていた以前の自分からは想像も出来なかったこと——大学で文学を学びたい——そんな気持ちが自分に芽生え始めているのを感じていた。

しかし母にそのことを話すと、予想通り一蹴された。

「あなたは中学出たらあたしの店で働かせてあげるって、ずっと言ってるでしょ」

場末のキャバクラを経営する母が、娘の文学への興味など理解するはずがなかったし、美佳自身何人目になるか分からない父親には、

相談する気さえ起きなかった。

けれど美佳は、簡単には折れなくなかった。

今までの人生、ずっとただ流されるままに生きてきた。望んだって何も手にはいるわけがない。そう思って全部諦めて。

だけど今だけは、絶対に諦めたくない。あたしはあたしだ。あたしが生きたいように生きられるはずなんだ。

「じゃあせめて高校に行かせて。大学は自分でなんとかするから」

「ダメだって言ってるでしょ。大体、高校だとか大学だとか、勉強なんてただの一度もしたことないくせに何言い出すんだか」

「勉強はもちろんする。今だってやってる」

あたしのことなんて、何も知らないくせに。何も見てないくせに。

そう叫びだしたいのを、美佳はぐっと堪えた。

だけど次の母の言葉に美佳の我慢は限界を超え、同時に、この人にはいくら言っても無駄なのだということを悟った。

「何やってんのか知らないけど、何したって無駄だよ。淫売の子は所詮淫売にしかねないんだから。あんたには、キャバ嬢か風俗やって食っていくしか脳はないんだよ。おとなしく、中学でたらあたしの店で働きな」

今まで何度、この言葉を言われたか分からない。

淫売の子は淫売――。

だけど、それにここまで反発を感じたのはこの時が初めてだった。

「あたしは……あたしは、あんたみたいなクズとは違う……！ あ

んたの店で働く気なんかない！」

吐き捨てるようにそう言うと、美佳は荷物をまとめて家を出た。もうここに戻ってくることは二度とないだろう。そんなことを考えながら。

ちょうど中学3年の秋のことだった。

それからの半年間、美佳は、何人目かの“元”父親のところに転がり込んだ。

彼は美佳を受け入れもしなかったが、追い出しもしなかった。

美佳にはかえってそのほうが都合が良かったので、お互いの生活を阻害することもなく、美佳はそこから中学に通い、卒業した。結局半年間、母親は美佳を一度も探してくることは無かった。

行けるところなんて他にそんなないことぐらい分かっているだろうし、その気になればすぐに見つけられるはずだろう。

所詮、その程度の親でしかなかったのだ。美佳は、本当の意味で母親との決別を果たした。

中学卒業後は、その元父親に名義を貸してもらい、アパートを借りた。

もちろん資金的な援助は一切無いし、美佳もそんなことは期待していない。

高校だって、行かせてくれるなんて甘いことは考えていなかった。そもそも大学はもう、大学検定を受けていくつもりだったのでそれはもういい。

それよりも当面の問題は、やはりお金の問題だった。

16歳の美佳がお金を得るとなると、真っ当なものだとファーストフード店などの高校生OKのアルバイトぐらいしかない。

だけどそれでは、とてもではないが生活していく分さえ稼げそうに

なかった。

大体、美佳にはお金と同じくらい時間が必要なのだ。

自分が勉強が何も出来ないのは痛いくらい分かっている。

大学進学を決意して半年間、小学校の教科書から戻ってやり直してみたが、それすらもまともに理解できないというありさまだった。

お金を稼いで生活を立てて、残りの時間で勉強をする。

ある程度基礎を身につけることが出来たら、塾なり家庭教師なりで学ぶようにしなければ、独学では限界があるだろう。

そのためのお金だって必要だ。となるとやはり、残された選択肢は真つ当な道で得るお金ではなく……。

自分の小さな体を見下ろしながら、その値段はいくらぐらいだろうと考えてみた。

すぐに、母親の顔が頭に浮かんでくる。

そうだ、いけない。自分はある人とは違う道を歩むと決めたのだ。

そもそも母親のことを抜きにしても、キャバクラや風俗では働けないな、と思っていた。

最近は無成年の女の子を働かせている店への摘発が厳しくなっているらしいし、普通のアルバイトよりは賃金の割りはいいけれど、結構な時間を拘束されてしまうことになるのが痛い。

家賃を払って生活費を捻出して、そのうえ勉強のためのお金を貯金しようと思ったら、結局普通のアルバイトと同じぐらい働かなければいけないだろう。

そんなのではなくて、もっとこう、1日働けば十万円単位の報酬がもらえる。

そんな仕事か、今の美佳にとっては一番理想的だった。

そして美佳には、そのあてがある――。

前に住んでいた元父親の家で見つけた、一枚のチラシ。

「モデル募集」と書かれたその紙は、よく読むとなんてことはない。アダルトビデオに出演する女性を募集する内容だった。

けれど、その条件はまさに美佳が切望するものだった。

1回の撮影で、10万円のお給料が支払われます。

そのチラシを睨み付けながら、色々なことを考えた。

母親のこと。啖呵を切って飛び出した自分のこと。

ああはなりたくないと思う気持ちとプライドが、美佳をすんでのところで思い留まらせていた。

だけど現実問題として、今の美佳にはこの方法でしか現状を打破する手段が思い当たらなかった。

元父親の部屋にチラシが転がっていたということは、おそらく彼もこの仕事に関わっているのだろう。

それなら、化粧さえすれば年齢だっていくらでも誤魔化せる。

「やってみるしかないのかな……」

淫売の子は淫売——。呟いた美佳の頭の中で、その言葉が痛いくらい響く。

そうだ。あたしはあの人とは違うんだ。あの人とは違う。あの人とは違う……。

言い続けて、美佳は気づいた。

そうだ、あの人とあたしは根本的に違う。

あの人にとっては、水商売が最終点だった。誇りもなにもなく、ただ生きるために自分の体売る。

けどあたしは違う。あたしにとって、これは単なる通過点でしか

ない。

本当の大きな目標に向かうための、ターニングポイント。努力のための糧。

大学に行つて、勉強をして、もしかしたら学者が何かになつて。

そこにはきつと、あの人が欠片も感じられたことが無い充実感が、誇りがあるだろう。

その目標へとたどり着かせてくれた通過点は、たとえば体を売るということであっても、あたしにとっては大切な人生の一部なんだ。

あたしはきつと、それに胸を晴れるだろう。

誇りのための誇り。あの人がやっていた汚らしい水商売なんかとは全然違う。

人からしたら詭弁にしか聞こえなかったかもしれない。だけど美佳は、本当にそう思った。

次の日美佳は、パンフレットに書かれている事務所のドアを叩いた――。

そんなあたしなんだから、嫌だなんて気持ち、あるはずがない。

自分を人形だと思い込ませて、ただ毎回の撮影をやり過ごしているような子達なんて、あの女と同じだ。

だからあたしは、他の子たちとは違う。

いつかたどり着く光り輝くフィールドへ向かうためのこのステップ。あたしはそれを、全力で楽しんでいる。

もう何発目になるか分からない精液を胸で受け止めながら、美佳はぬめって妖しく光る極上の笑顔を男に向けた。

もうそろそろおしまいかな――？

体から立ち上ってくる精液の刺激臭に鼻を刺激されながら、ふと美佳は、視線の端に自分を凝視している者の存在を感じた。

まだ少年のあどけなさの残る顔をしたその男は、美佳の裸体を見つめながら一心不乱に自分の性器を触っている。

だが、その性器は誰の目から見ても明らかに勃起していない。

あの人は確か、まだ1回も射精してないよね。

10数人の男に射精されながらも、美佳はそれをきちんと把握していた。

つまり彼は、1回も射精していないのに勃起さえ出来ていない状態なのだ。

初めての人なのかな。

そう思つて、気づかれないようにこつそりと視線を向けてみる。

ほとんどが中年の男ばかりの中にあつて、かわいらしささえ感じるその人懐こそうな顔は、ずいぶんと場違いな印象を受けた。

恐らくまだ、20才を少し超えたくらいだろう。

大学生が、興味本位と性欲処理の目的でやってきたのだろうか。

つやつやとしたその顔は、苦労なんて何もしたことがなさそうだった。

きつと親に大学に行かせてもらつて、お金に不自由なんてしたこともなくて――。

それが、こんなところで汁男優だ。

「また違う意味での人間失格ね」

精液を太ももにかけさせながら、美佳は小さく呟いた。

結局その青年は一度も射精することなく、撮影の時間が終了した。うなだれて、スタジオを出て行く青年の後姿を美佳は見送る。

バイバイ。お坊ちゃんの来るところじゃないんだよ。

心の中でそう毒づいて、全身の精液を洗い流すためにシャワールームへと向かう。

さーで、これが終わったら勉強勉強つと。

今日は、日本史やって化学もやってー。

ボディソープの泡が立つころには、美佳の心からはその青年のことはすっかり消えてしまっていた。

美佳がアダルトビデオの仕事始めてから、季節は2回目の冬を迎えていた。

第三話

< 気をつけなければいけないこと >

- ・ 撮影中に自信を喪失しても、反省してくよくよしたりしない。
- ・ 興奮を維持させることに集中する。
- ・ 出来るだけ目を閉じておくようにする。

「よし」

箇条書きされたメモを読み返し、寿幸は小さく呟いた。

昼下がり、乗客のまばらな電車へと乗り込んで、郊外にある小さな撮影スタジオに向かう。

射精どころか、勃起すらさせられないというあまりにも情けない失敗をしてしまった前回の撮影から2週間――。

運よく寿幸は、またインターネットの掲示板で汁男優を募集している記事を見つけることが出来た。

驚いたのは、女優が前回と同じ、今売出し中の人気アイドル女優――神藤美佳であることだった。

もちろん単なる偶然に過ぎないのだろうが、寿幸はこの幸運を与えてくれた神様に素直に感謝した。

彼女がまさか自分のことを覚えているなどとは思っていない。

けれど、前回失敗してしまった女優相手にきちんと射精することが出来れば、寿幸にとってははじめをつけられることになる。

改めてこの世界で生きていこうと決意した寿幸にとって、それは願ってもない汚名返上のチャンスだった。

「大切なのは考える力だ――」

玄と名乗った男が言ったその言葉が、2週間のあいだ寿幸の頭の中をずっとぐるぐる回っていた。

分かっているって玄さん。ちゃんと俺なりに考えてきたつもりだぜ。

電車の座席に深く腰掛け、寿幸は改めてメモ帳に書かれている項目を確認する。

まず1つ目。撮影中に反省しない。

これは前回の、最大の失敗点だろう。

自分ではすぐに気持ちを切り替えたつもりでいたが、あのせいで勃起どころではなくってしまったのは明らかだ。

周りはベテランばかりなんだから、自分が劣って見えるのは当たり前。

そんなことをいちいち気にしては話にならない。

次に2つ目。興奮を維持させることに集中する。

これは言うまでもないことなのだが、自分はどうもすぐに余計なことを考えてしまう節がある。

だから撮影中に平気で反省なんかもしてしまうのだ。

もっと意識を集中させて、頭の中を自分が興奮するようなことで埋め尽くす。そうすれば、勃起が萎えることもなくなるだろう。

そして3つ目。これが今回寿幸が考えた、最大のポイントだ。

出来るだけ目を閉じて、周囲の様子を視界に入れないようにして本番に臨む――。

つまり、余計なものを見てしまうから、関係の無いことを考え始めてしまうのだ。

逆に言えば、周りを見ずに自分の意識の中にだけ閉じこもっていれば、必然的に興奮が失われる心配も無い。

「完璧だ……」

電車の中であることを忘れ、寿幸は思わず声に出して言うてしまう。それくらい、この作戦には自信があった。

もちろん、前回の撮影から今日まで一度もオナニーはしていない。体調管理の面も含めて、全てが完璧だった。

「ふふふん」

あまりの余裕に、自然と鼻歌まで出てしまう。

約3時間後、まさか自分が失意のどん底にいることなど知る由もなく……。

そして3時間後――。

前回と同じように、誰もいない控え室で寿幸は机に突っ伏していた。あまりの情けなさに、ため息さえも出ない。

3時間前の、浮かれて鼻歌なんか歌っていた自分が死ぬほど恨めしかった。

考え方は悪くなかったと思う。

事実、撮影が始まる前から必要最低限しか目を開けずに自分の世界に閉じこもっていた甲斐があつてか、前回はあるなりに苦労してもまったく堅くならなかった性器が、すぐに勃起した。

よし、これならいける！

寿幸は、機を逃すまいと無我夢中で性器を擦った。

頭の中で考えていたのは、最近見た神藤美佳の新作DVDのワンシーンだ。

確かに、矛盾していることだとは自分でも思う。

今日の前に、その神藤美佳が裸で座っているのだ。

固く閉じている瞳を開きさえすれば、いつだってその美しい裸体を見ることが出来るじゃないか。

だけど目を開いてはダメだ。ダメなのだ。

前回の経験から、それは学んでいた。

別に自分は、神藤美佳という女優のことが嫌いではない。むしろ好きだ。

頭の中でDVDのシーンが再生できるくらいなのだから、それは言わずもがなであろう。

しかし、目を開けるとどうしても視界の端に他の男たちの姿が入ってきてしまう。

そうなったら最後、自分の集中が途切れて気持ちが萎えてしまうことは分かっていた。

せつかくここまで維持できた興奮を失うようなことだけはしたくない。

このまま突っ走ろう――。

寿幸はそう決めて、目を閉じたまま性器を擦る手にラストスパートをかけた。

徐々に快感が高まってきているのが分かる。

いける！ 射精できる――！！

だがその瞬間になって初めて、寿幸はこの作戦な重大な欠陥に気が

ついてしまった。

このまま目を閉じていたら、たとえ射精できてもどこに精液が飛ぶか分からないのだ。

寿幸としては撮影開始からずっと、女優に向かって真っ直ぐ立っているつもりではある。

しかし目を閉じて激しい摩擦運動をしているのだから、知らず知らずのうちに体の軸がずれている可能性も十分にあるだろう。

その状態でそのまま射精したらどうなるか……。

神藤美佳の体のはしっこにでもかけられるならまだ及第点。

けれど最悪の場合、ベッドや床にぶちまけてしまう恐れもある。

それを考えると、目を閉じたまま射精するのはあまりもリスクが大きすぎる。

仕方ない、最後だけ目を開けるか……。

まあここまでいけそうになってたら、最後くらい大丈夫だろう。

そんな楽観的な思考もあった。

手の動きはさらに速くなり、射精感は既に限界に達そうとしていた。よし、今だ！ 寿幸が目を開く。

その瞬間。現実が、ものすごい勢いで彼を襲った――。

結局寿幸は、それからもう一度も勃起することが出来なかった。ずっと自分の世界に閉じこもって妄想で興奮を得ていた分、現実とのギャップは激しく、余計に気分を萎えさせられてしまったのだ。2連続で失敗。その事実が、否応なしに寿幸の気持ちを深く沈みこませていく。

「向いてないのかな……」

机に突っ伏して頭を抱えていると、なんだか自分が世界一情けないヤツのような気がしてきて、思わず涙が出そうになった。

いや、ダメだダメだ。射精に失敗して泣いている顔なんて誰にも見られたくない。

泣くのなら、ここじゃなくて家だ。そう思った寿幸が、机から身を起こそうとしたその時。

「よう」

頭上から、寿幸が忘れたくても忘れられないあの声が聞こえてきた。え……？ この声はまさか……？

驚いて、寿幸はがばつと顔をあげる。そこにいたのは、やはり想像していた通りの人物だった。

「玄さん！　なんでここに？」

いつからいたのか、寿幸の真向かいの席に悠然と腰かけていたのは、前回の撮影後に寿幸に説教めいた言葉を言い残して去っていったあの男だった。

神藤美佳だけでなくまさか玄さんにまで再会するとは思っていなかったので、寿幸はなんだか嬉しくなる。

「なんだおめえ。一緒に共演してたヤツの顔すら見てねえのか」

だがその言葉を聞いて、嬉しいと思った気分は一瞬で吹き飛んでしまふ。

そつだ。自分は、玄さんに前回アドバイスをもらったにも関わらず

また失敗してしまっただ……。

「まア、あんなに固く目を閉じてちゃ仕方ねえだろうけどよ」

そんなところまで見られていたのかと思うと、恥ずかしさのあまり寿幸は今すぐこの場から消えてしまいたくなる。

自分が立てた拙い計画のことなんて、全て見透かされているような気がした。

「いやあ……。俺なりに考えてはみたつもりだったんですけどね……」

言い訳のように呟くその言葉を聞いて、玄さんは眉をしかめた。

「お前、この前俺が言ったこと聞いてたか？ 汁男優一人一人がしつかり周りの状況を把握してなきゃいい絵は撮れねえ。俺は確かにそう言っただけ。ハナっから目つぶっててどうすんだよ」

「あ……」

言われて、確かにそんな話をされたことを思い出す。

なんてことだろう。玄さんのアドバイスに従って頭をひねったつもりが、出発点からして既に大きく間違えていたのだ。

「そんなもん、考えたなんていわねえよ。現実から逃げてるだけだ。お前が目え閉じて、頭ン中で必死にえろい事考えて出したような偽物の精なんて、誰も望んじゃねえんだよ。欲しいのは、撮影中のあの空気感から生み出される本物の興奮だ。ただ精を出してりゃいいくらいにしか思っただけなんなら、こんな業界に足を踏み入れてくんじゃない」

容赦のない玄さんの言葉を、唇を噛み締めたまま寿幸はただ黙って聞いていた。

少しでも気を抜くと、一気に涙が溢れてしまいそうだった。

「つとまあ……えらそうに言ってるが、お前が目を閉じちまえばいいって気持ちになったのも分かる。俺だって、駆け出しのころは同じような間違いをしでかしたもんだ」

玄さんの声が、幾分か柔らかくなる。

「だけだよ、目は決して背けるな。女優からも、自分自身からも。お前はセズリききにここに来てんじえねえんだ。自分は一体何のためにこの場所にいて、誰に精をかけようとしてんのか。そこそこは見失っちゃいけねえぜ」

「仰ることは分かります……。けど……。！ けどダメなんですよ……！ この前の撮影の時だって、最後のほうは意識を集中して女優さんのことだけを見ようと思いました。だけど視界の端から周りの光景がどんどん目に入ってきて、そしたらどうしても気分が萎えてしまっ……」

悲痛な声で、寿幸は叫んだ。

玄さんになんとか助けてもらいたいと、すがるような想いもあったのかもしれない。

「なア、若いの」

そんな寿幸に向かって、玄さんは静かに言った。

「誇りを持て」

「え……？」

「お前がやってんのは、決して恥ずかしい仕事なんかじゃねえ。自分が何をやってるのか胸を張って堂々と言えるくらい、自分の仕事に誇りを持ちな。そしたらすぐに、周りのことなんか気にならなくなる」

「誇り……ですか……」

「それが出来そうにねえなら、興味本位でこんなところに来るのは、悪いこたア言わねえよ。やめといたほうがいい」

寿幸は、ただ黙って机の木目を凝視していた。

誇りのことなんてもちろん、一度も考えたことが無かった。

「よし。まあ、こうやって再会したのも何かの縁だ。おめえにひとつ、チャンスをやろう」

重苦しい空気を打ち破るかのように、玄さんが少し明るい調子で言う。

「え？」

「俺は今日の監督とは顔なじみでな。そいつが近々、また今回の嬢ちゃん——神藤美佳で1本撮るんだとよ。その時の汁男優に、お前を使うように言ってる」

「本当ですか……？ いや、でも俺は……」

「もちろん、自信がないなら無理に来いとは言わねえ。3度目の何とやらだ。次ももし失敗するようじゃ、残念だがお前はこの業界で生きていくのは諦めたほうがいい。俺としても、見込み違いだったってことでお前のことは忘れちゃうことにするさ。だからよ、今すぐには返事しないでいい。しばらく時間をやるから、考えてから答えを出しな。俺のこの話、受けるのか受けないのか」

「はあ……」

「まあこの監督も、別にぶっかけシーンばかり撮ってるわけじゃねえからな。近々つつつても、次の撮影は大体1ヵ月後になるそうさ。だから、そうだな……。まあ、1週間以内で返事しな」

じゃアこれ、電話番号な。

と、1枚のメモ用紙を渡すと、玄さんはそれきり寿幸の方を振り返ることなく控え室を出て行ってしまった。

取り残された寿幸は、椅子に深く腰掛けて天井を仰ぎ見る。

結局玄さんは、何かヒントをくれたのだろうか。

誇りを持て。そう言われても、たった2回ほど汁男優をやってみただけの自分には、そんなことがピンと来るはずはなかった。

ただ一つ確実に言えることは、このまま次回の撮影に挑んだとしても、どうせまた失敗するだろうということ。それだけだった。

第四話

あの時の既視感の正体に、やっと気がついた――。

玄さんと初めて話した時、「見たことがある人だな」と感じたのを寿幸は今でもはっきりと覚えている。

しかしその時はあまり深く考えず、直前の撮影中に彼の姿を見かけたことによるものだとは判断した。

だけど、それだけじゃなかったんだ。

もっとそれ以前、1年近くも前からずっと、俺は玄さんのことを知っていた。憧れにも似た気持ちを抱いて。

それに気がついた今なら、「誇りを持て」という言葉の意味もすんなりと理解することが出来る。

答えはこんなにも近くにあったのに、今さら気がついた自分の愚かさが増らしかつた。

けれど、それ以上に嬉しい気持ちのほうが強かった。

悩んでいた頭の中が、靄が晴れるようにクリアになっていく。

食い入るように見つめるパソコンの液晶モニタには、真っ白い家と純白のワンピースを着た少女、そして1人の青年の姿が映っていた――。

――

話は、寿幸が玄さんに最後通牒を受けた直後に遡る。

1人取り残された控え室から出てとぼとぼと帰途についた寿幸は、

マンションに着くなり力なくベッドに倒れこんだ。
玄さんにどんな答えを返せばいいのか分からなくて、気が重い。

挑戦したいという気持ちはあった。だけど、もう恥をかくのは嫌だった。

3度目のチャンスを棒に振った拳句、逃げるように業界から去っていくはめになることも。

それなら今、このまま玄さんに返事もしないですっぱりと足を洗えば、自分のプライドだって傷つかずに済むんじゃないだろうか。

色んな気持ちがごちゃまぜになって、爆発しそうだった。

ベッドの上で両足をばたばたさせて悶えてみるが、答えは出ない。

しかし数分後、その足の動きがふいに止まる。

そして寿幸は、何かを思い出したかのようにもぞもぞとベッドを起き上がり、壁際にある棚に手を伸ばした。

取り出したのは、1本のアダルトDVDだった。

「大空を泳ぐ魚」というまるで映画のようなタイトルが冠されたそれは、今から20年ほど前に活躍していたAV女優——夢宮綾音の最後の出演作品となったものだ。

伝説として語り継がれるAV女優、夢宮綾音——。

しかし一度も作品を見る機会のなかった寿幸が知っていたのは、その名前くらいのもだった。

一体彼女は、何をもってして伝説と呼ばれるのか。

ずっと興味を抱いていた寿幸は、20年前にVHSビデオで発売された「大空を泳ぐ魚」が、DVD化して再販売されると同時に購入した。

それがちょうど、今から1年ほど前のことだ。

「大空を泳ぐ魚」は、最近ではほとんど見かけなくなったストーリー仕立てのアダルトビデオだった。

見渡す限りの地平線が広がる大草原。

その原っぱの中心に、ぽつんと建つ白塗りの大きな家がある。

物語は、主人公がその家を訪れるところから始まる。

主人公は、画家志望の青年だった。

しかし、スランプに陥って絵が描けなくなってしまふ。

描けば描くほど、自分の理想とは程遠い絵が出来上がってしまうことに青年は耐えられなくなったのだ。

失意のまま旅に出た青年は、その大草原の家に偶然たどり着く。

ふらふらと何かに惹かれるように家に入ると、そこには純白のワンピースを着た少女が住んでいた。

少女を演じるのは、もちろん夢宮綾音だ。

少女はまるで、青年をからかうかのように家の中を優雅に駆け回る。青年は、自分でもよく分からないままなぜか夢中で少女を追いかけた。

しかし、どうやっても少女は捕まらない。

困った青年は、一度少女を追いかけることを諦めてソファに腰を下ろし1枚の絵を描いた。

少女の姿を模写したその絵は、いつも通り自分の理想からは程遠い出来のものだった。

けれどそれに興味を惹かれたのか、さつきまでは逃げ回っていた少女が、気がつけば青年の隣に立ってその絵を覗き込んでいた。

そして2人はそうすることがずっと前から決まっていたかのように、唇を合わせ、肌を重ねるのだった――。

寿幸なりの解釈だが、白い家に住む純白の少女は、青年の抱く理想や夢の象徴のような存在だったのだろう。

つまりこのストーリーが言いたいのは、大切なのは理想だけを追い求めることじゃない。

今自分がやれることを一生懸命がんばる事こそが、夢を叶えるための一番の近道なんだよ。

とまあ、そういう感じのことなのだと思う。

ありがちながらも、アダルトビデオでありながらメッセージ性を持ったそのストーリーに寿幸は好感を持った。

サイレントムービーの様に台詞が一切なく、主演の2人の演技だけで物語を見せるというのも斬新だった。

しかし何よりも一番印象に残ったのは、やはりセックスシーンであった。

夢宮綾音と、その男優が交わる姿はただ美しかった。

別に、上品なセックスをしているわけではない。

特に夢宮綾音は、純白のワンピースを着た少女の役とは思えないくらい、激しい嬌声を上げて体全体で男優を受け入れていた。

まるで、今日でこの世界が終わってしまうかのように。

けれど、そこには嘘偽りが一切無かった。

演技臭さのようなものがまるで感じられないのだ。

少なくとも寿幸には、これがカメラが回っている中で行われたものだとはには信じられなかった。

そんな2匹の獣が絡みつくようなありのままに自然なセックスを、寿幸は心の底から美しいと思った。

夢宮綾音が伝説の女優と呼ばれる理由が、分かったような気がした。

アダルトビデオを見て、セックスシーンが美しすぎるという理由で性的な興奮が得られなかったのは、それが初めての経験だった。けれど寿幸は、DVDの代金を惜しいとは思わなかった。

1本の良い映画を観終えた後のような充実感があつたし、何よりも今、この業界に足を踏み入れようとしていることに「大空を泳ぐ魚」の影響があるのは確かだろう。

そんな今の自分の原点となっているこの作品を改めて見直せば、心の中に広がっている迷いも消えるんじゃないだろうか。

ベッドの中で悶えながらそう考えた寿幸は、購入以来何度目になるか分からない「大空を泳ぐ魚」の鑑賞を開始したのだった。

パソコンのDVDドライブの中で音を立ててディスクが回転し、再生が始まる。

冒頭、俯き加減で白い家の玄関に佇む青年の姿を見たときは、まだ何も感じなかった。

けれど、青年が自信を失って旅に出るまでの回想シーン、少女との出会いのシーン、逃げ回る少女を追いかけるシーン……順番に物語を追っていくうちに寿幸は、見慣れたはずのその画面に徐々に奇妙な違和感を覚え始める。

それと同時に、寿幸の頭の中にある一つの疑惑が浮かび始めた。

「これ、もしかして……」

そしてその疑惑は、中盤の絵を描くシーン、スケッチブックに向かう青年の横顔がアップにされてモニタに映し出された瞬間に確信へと変わった。

「やっぱりそうだ……。これ……」

自室で1人きりにも関わらず、寿幸は思わず声に出して言う。
う。

「玄さんだ……」

あんなに何度もこの作品を見たのに、なんで今まで気がつかなかったんだろう。

確かに、20年という歳月のせいで、自分が知っている玄さんとの青年の顔からは受ける印象が随分違う。

少なくともこの青年からは、今の玄さんが持つ威厳のようなものは感じられない。

だけど、憂いを込めた表情でスケッチブックに向かうその横顔は、若き日の玄さんのものに違いなかった。

アダルトビデオは通常、パッケージに出演男優の名前は明記されない。
い。

それは、「大空を泳ぐ魚」も同じだった。

映画仕立てとは言え、さすがにスタッフロールなんてものまでは存在しなかったし、この青年が玄さんだと確かめる手段はない。

だけど、寿幸はそれが玄さんだと確信していた。

そう思った根拠は、面影が似ていたからだけではない。

「誇りを持って」

玄さんが堂々とそう言えるのは、きっとこの作品があったからなのだろう。

それを思つと、ピンと来なかったその言葉が違和感なく受け入れられた。

いや、玄さんに言われるまでもなく、俺は最初からずっとそのつもりでいたんじゃないか。

「大空を泳ぐ魚」を初めて見てからずっと、この2人のようになりたかった。

俺はまだ、駆け出しの——しかも一度も仕事を成功させたことすらない——男優でしかないけれど、いつかはこんな風に誰かを感動させる仕事をしてみたかった。

それが出来た時に俺が得ているのはきつと、胸を張ってこんな仕事をしたと言える「誇り」なんじゃないだろうか。

性欲が処理できたうえお金が稼げるなんて最高だとか、そんな気持ちももちろんあった。

だけど、それ以上に俺は俺という存在を表現してみたかった。セックスシーンが芸術作品のような感動を人に与えられる。

「大空を泳ぐ魚」を見てそれを知ったからこそ、この道を志すことに踏ん切りがついたんだと思う。

答えはもう出ていた。

玄さんにもらったメモを見ながら、携帯にその電話番号を入力して発信する。

「あ、玄さん。俺です」

「よう、お前か。どうした？ 答えを出すのは1週間以内でいいって言ったはずだぜ」

「もう答えは出ました。さっきのお話受けます。やらせてください」

「本当にいいのか？ 今さらこういふこと言うのもなんだけどよ、別にこんな俺の提案に乗っかってくることもねえんだぞ。お前がこ

の世界で自分のやり方でやっていきたいって言うんなら、俺の話なんか無視して、勝手に自分で仕事を見つけてくりゃいいんだからよ。別に俺は、お前をこの業界から干したりする力なんてねえんだ」

「いえ、いいんです。俺は――」

玄さん――。

あなたに、認められたい。

そう言いたかった。

「大空を泳ぐ魚」のことだって、本人に直接確かめて聞きたかった。だけどそれは、せめて1ヶ月後の仕事を成功させてからにしよう。そう思った。

玄さんが、本当にあの青年であるかどうかよりも、重要なのは「誇りを持つこと」。それを、俺に思い出させてくれたことだったから。

「よし、分かった。じゃあ監督に話つけといてやるよ。じゃアな、1ヶ月後だ」

「ええ、1ヶ月後――」

第五話

古典の問題集がきりの良いページまで進んだところで、美佳は大きく伸びをした。

長時間同じ姿勢をとり続けていたせいで強張っていた筋肉がほぐれていく。

「それにしても、目を閉じてるなんて失礼な話だよね」

続けて腰を左右に回転させながら、独り言の様に美佳は呟いた。

ポキポキポキと、小気味良い音がボロアパートの一室に静かに響く。

思い出していたのは、今日の撮影中での出来事だ。

自分の周囲を取り囲んだ汁男優の中に、美佳は前回一度もいけずにとぼとスタジオを出て行ったあの青年の姿を見つけた。

そんなにはつきりと顔を覚えていたわけではないが、現場には自分に年齢の近い人は少ないのですぐに分かった。

あんなにみじめな失敗をしたのにまたやってくるとは意外だったが、そもそもそんなプライドさえも持ち合わせていないのかもしれない。苦勞知らずのお坊ちゃんのことなんて、美佳には分からなかった。

だけど不思議だったのは、その青年が固く目を閉じていることだった。

なにやってんだろあの人……。何かのおまじない……？

美佳がその理由に気づいたのは、本番が始まってからすぐのことだった。

なぜなら彼は、本番が始まってからも目を開けることなく、一心不乱に自分の性器を刺激しているのだ。

他の汁男優たちは、目の前の美佳の体に欲情し、その高まった興奮の証を全身に容赦なくかけてくる。

嬉しいというわけではなかったが、自分が今この場の主役であるということは実感できた。

だけどその青年は、美佳を見ずに頭の中で何か別のことを考えながら興奮しようとしているのだ。

自分という存在の価値を否定された気がして、美佳は腹が立った。

しかし結局その作戦もむなしく、青年は今回もいけなかったらしい。撮影終了後、またしてもがつくりと肩を落としてうなだれたままスタジオを出て行くその姿を見て、美佳は心の中でほくそ笑んだ。

ふふん、いい気味。

頭の中で何考えてたのかは知らないけど、あたしよりいい女なんてそうそういるわけないんだからね。

別に自分が何をしたわけでもないのだが、なんとなく勝負に勝ったような気分だった。

これに懲りたら、もう2度とこんなところに来るのはやめときなさい。

小さくなる後姿に向かって、美佳はべーっ舌を出した。

「ホント、そこまでして汁男優なんかやろうとする意味がわかんないよ」

思い出したら腹が立ってきたのか、棘を含んだトーンで美佳は呟く。

まあでも、そんなことは忘れて勉強勉強。

古典の問題集を脇によけ、今度は英語の構文参考書を引っ張り出す。

大学に行くことを決意してから、約2年――。

どうやら美佳は、自分や親が思っていたほど頭の出来は悪くなかったらしい。

最初こそ、小学校の教科書でさえちんぷんかんぷんの状態が続いたが、1人暮らしを始めてから改めて教材を買い揃え、腰を据えてやってみたら自分でも驚くほどすらすと理解できた。

その甲斐あって、わずか3ヶ月あまりで小学校6年分の内容はあらかた終わらせることが出来た。

やるじゃんあたし。ずつと出来るわけないと思いこんでいた勉強がちゃんと出来ているのが、嬉しかったし誇らしかった。

だけど、中学校の内容に入ってからはそのも行かなかった。

小学校の内容と比べ、格段にレベルが上がっているのが分かる。

中学に入って急にグレ出す子が多い理由が、分かったような気がした。

しかし美佳は、投げ出さなかった。

ある程度だけど、自分がどれだけ時間をかければどこまで出来るかということが判断できるようになってきていた。

だからこれだって、時間をかけて一つ一つやっていけば大丈夫。頭がついていかないほどの内容なんて全然ないしね。

自分に言い聞かせながら、美佳は確実に勉強を進めていった。

そしてそれから約1年半。

今の美佳は、もう高校2年生と同レベルの内容でさえ理解できるほどになっていた。

古典や日本史。自分にはずっと無縁だと思っていたものの問題集を、撮影の合間を縫って美佳は次々に解いていった。

勉強の息抜きには本を読んだ。

市民図書館に行つては、興味の引かれたタイトルを片っ端から借りる。

もう以前の様に、漢字や言い回しに戸惑うこともなかった。

いつの間にか、美佳の読解力は随分と上がっていた。

最近では、日本だけではなく海外の作家の作品も読み始めた。

ドストエフスキーはあまり好きになれなかったが、カミュやカフカは面白かった。

特にカミュの「異邦人」は、不条理な運命をただ受け入れていく主人公の姿が以前の自分自身の生き方と重なって見えて、心に残った。

大学に行って文学を学びたい――。

半ば勢いで言ってしまったこの言葉が、自分自身どこまで続くか少し不安だった。

途中で飽きたり挫折して投げ出してしまうんじゃないだろうか。それが一番怖かった。

だけど、あれから2年と少し。あたしはまだ、目標を見失ったりしていない。

本だって、まだまだ読みたいものがたくさんある。

だから大丈夫。あたしはきっと、その場所に辿り着ける。だってあたしは、あの女とは違うんだから。

「うー、寒い」

2時間あまり、黙々と構文参考書を片手に勉強してふと我に返ると、やけに体が冷えていることに気がついた。

安い物件だけあって建て付けがあまり良くないため、どこからともなく隙間風が入り込んでくるのだ。
そのせいで、いくら暖房を強くしても室内はいつもひんやりとしていた。

「まったく、ボロアパートめ」

毒づいて、美佳はぱたりと参考書を閉じる。

なんだかちよつと全身が気だるい。

少し熱があるような気もするし、今日はもうそろそろ寝よう。

あたしの仕事は、体が何よりの資本だしね。

布団にくるまり、誰にと言うわけでもなく小さな声で「おやすみ」と呟く。

数分後にはもう、美佳は夢の中だった。

こうして、美佳の毎日は過ぎていった。

1日1日が充実しているのが、はつきりと実感できる。

今までの自分の人生は、まるで空っぽだった。

目標がないから、何かを頑張るなんてこともなく、ただ毎日が漠然と流れていた。

春が過ぎて冬が来て、また春が訪れても何も感じなかった。

ただ、もう1年経ったんだ。そう思うだけだった。

だけど、今は違う。あたしにとって、毎日が全部貴重な瞬間だ。そう思って生きられるようになったことが、何よりも嬉しかった。ずっとこんな風な自分でいたい。美佳は心からそう思った。

そしてそれから数週間が過ぎた、ある日の撮影のこと。

「げ、また来てるよアイツ」

いつものように自分を取り囲む汁男優の中に、あの青年がいることに気づいて美佳は思わず顔をしかめた。

なによ、また目を閉じて出そうってつもり？

思わず面と向かってそう言ってしまうくなる。

けれど美佳は、すんでのところでそれを思いとどまった。

この前とは違って、青年がしっかりと目を開けていることに気がついたからだ。

それに、雰囲気が今までとはなんだか少し変わっていた。

自分よりも年が上の人間にこんなことを言うのもおかしいが、大人になった……とでも言えはいいのだろうか。

以前までの少しおどおどしたような感じは取れて、落ち着きのようなものを感じられた。

そして何よりも違っていたのは、その視線だった。

本番がスタートして美佳を見据えてくるその視線には、穏やかな温かさがあった。

美佳の胸を、顔を、お尻を見て興奮を滾らせるだけの男たちの視線とは決定的に違う何か――。

表面的なものを見るんじゃないくて、まるで心の奥底まで覗きこんでくるような視線が、不思議と美佳は嫌ではなかった。

彼が始めて撮影に参加したときに感じた、あの全身を這い回るような視線とはまるで違う。

あれには嫌悪感しか感じられなかったが、この温もりなら受け入れられる。そんな気がした。

美佳を見つめてくるその青年の視線に、美佳も自らの視線を合わせる。

中空でそれが交錯し、美佳はまるで金縛りにでもあったかのように、その視線を逸らすことが出来なかった。

いつの間にか、青年に抱いていた否定的な気持ちは随分と薄れていた。

青年の視線が、絶頂に近いことを訴えかけてくる。

美佳も、自分の体が芯から熱くなっていることを感じていた。

「いいよ」

心の中で思わずそう言ってしまう。

まるでそれを感じ取ったかのように、その瞬間、青年が大量の精子を吐き出した。

その白い液体は、シャワーのように美佳の全身に注がれる。

「熱っ……」

無意識で声が漏れた。

それくらい、今ここにいる他のどの汁男優のものよりも、美佳の体にかけられたその精液は熱かった。

何があっただろうこの人……。

撮影中にも関わらず、ついそんなことを考えてしまう。

前の撮影からおよそ1カ月あまり。

他の色んな現場で経験を積んできたという可能性もあるが、美佳はおそらくそれは違うと思った。

そんなのじゃなくて、もつと根本的な考え方を变えるような何か――
|。
なんとなくだけど、そんなものがあつたに違いないと美佳は思った。
それに、あたしで2回失敗したのに他の子で練習してきてリベンジ
だなんて、そんなの許せないもんね。
うんうん。

「ありがとう」

他の男たちにするように、美佳はにっこりと微笑んで精液をかけて
くれたお礼をした。

もちろんこれは、撮影上の演出だ。

ただど美佳は、青年にだけ特別に、その笑顔にもう1つの意味を込
めた。

「やれば出来るじゃん、お坊ちゃん」

それが伝わったのか、青年は照れ臭そうにはにかんだ。

第六話

「大空を泳ぐ魚、って知ってますか？」

初めて射精が成功した撮影を終えたその後、寿幸は控え室で玄さんに思い切って尋ねてみた。

「あア、なんだお前。あれを見たのか」

玄さんは、こともなげにそう答えた。
そのリアクションに、張り詰めていた寿幸の緊張の糸がふっと切れる。

「やっぱりあれ、玄さんだったんですね」

「やっぱりって言われてもよくわかんねえけどよ。あれに出演してる男優は俺だけ」

その言葉を聞いて寿幸は、自分の考えが間違えていなかったことを知った。

そして、憧れにも近い気持ちで見えていた男優が今日の前にいることが嬉しくなつて、思わず声を上げてしまう。

「やっぱりだ！ 玄さんって、思った通りすごい人だったんですね！」

興奮して、寿幸は玄さんに抱きついてしまう。
驚いた玄さんは、鬱陶しそうにそれを振り払った。

「な、なんだお前。悪いもんでも食ったのか？ 俺はそんな趣味はないからな。そっち系の撮影に参加したいなら、知り合いの監督がいるからいくらでも紹介してやるけどよ……」

「い、いや、そういうことではなくてですね」

玄さんにおかしな勘違いをされてしまったと気づき、慌てて寿幸は居住まいを正す。

「好きなんです俺。『大空を泳ぐ魚』が。この業界に入ろうと思っただけ、あの作品に出会ったからって言えるくらい」

その言葉を聞いて、玄さんの頬に少し赤みが差す。

「へっ。変わったヤツだなア。てめえはよ」

だがその声に嬉しそうな響きが含まれていることを、寿幸は聞き逃さなかった。

やっぱり嬉しいんだな――。

そりゃそうだ。自分の仕事を褒められて嫌な気分になる人なんているはずがないもの。

ましてや、自分の仕事に誇りを持ってやっている玄さんなら尚更。

「前の撮影に失敗してから、あれを改めて見返して気づいたんです。これ玄さんなんじゃないかって。そしたら、『誇りを持って』って言葉の意味も自然と理解できて――」

「だからあんなにもすぐ、答えの電話を寄越してきやがったってわけか」

1カ月前のことを思い出しながら、玄さんが言う。

「ええ。まあ、そんなところです」

「しかしまア、そんなもんで何かを掴んだ気になって返事してくるとは、随分危なっかしいヤツだなアおい」

「そうかもしれないですけど、俺は出来るって確信がありました。なんでかって言われたら上手く答えられないけど、ただ出来るって」

「まア確かに、初めて仕事を成功させたヤツにしては、今日の出来はなかなか良かったぜ。だけど忘れんじゃねえぞ。こっからがスタートなんだからよ」

「はい——！」

そう言つて控え室を出て行こうとする玄さんを、寿幸は慌てて呼び止めた。

「あつと！ ちょっと待つてください玄さん！」

「あん？ なんだよ、まだなんかあんのか？」

「いや、個人的な興味なんですけど、俺どうしても聞きたいことがあつたんですよね。『大空を泳ぐ魚』に関することなんですけど——」

おずおずと寿幸が切り出した。

あまり興味本位丸出しでそういうことを聞いたら、玄さんは気分を

害するかもしれない。

だがそんな寿幸の心配は杞憂だったのか、玄さんは軽く答えた。

「なんだよ、言ってみな。ただし俺が知ってることしか話せねえぞ」

「あ、良かった。あのですね、劇中で夢宮綾音さんが演じてた、純白のワンピースを着た少女なんですけど」

「うん」

「俺はあれを、夢だとか理想だとか、そういうものの象徴って風に捉えてるんですね。この解釈——あってます？」

初めて「大空を泳ぐ魚」を見て以来、ずっと思っていたことだった。自分なりにストーリーを解釈してみたものの、確かな答えはそこに存在しない。

少女を夢や理想の象徴として捉えれば、ストーリーの意味は合ってくる。

だけど何か、漠然とだけけどその解釈だと少しだけ何かが違う——足りないと言ってもいい——ような気がしていたのだ。

だからこのチャンスに、その本当の意味を知る玄さんにそれを聞いてみたかった。

そんな寿幸の問いに、玄さんが答える。

「ポルノ作品でよくそこまで突っ込んで考えようとしたもんだな。製作者冥利に尽きるってもんだぜ」

そう言って、玄さんはニヤリと笑った。

「だけどその解釈は、ちょっと間違つてんな」

「そ、そうなんですか？　じゃあ、あの少女は一体、何を表してるんです？」

やはり自分の解釈は、少し間違えていたのだ。

じゃあ、本来の意味は一体……？

寿幸は、少し緊張しながら玄さんの次の言葉を待つ。

「あれはな——」

そんな寿幸に、玄さんは静かに答えた。

「光だ」

ぽつんと取り残された部屋で、寿幸は呆然と立ち尽くしていた。
光……？

抽象的過ぎて、よく意味が分からなかった。

それならまだ、自分の考えていた理想や夢のほうの意味が通るんじゃないだろうか。

期待外れの答えに、少しがっかりしてしまう。

だけどもあ、メッセージ性を持つストーリーなんてそういうものなのかもしれないな。

そう考えると、胸につつかえていたものが取れたようで気分は軽くなった。

それにしても、今日は最高だよなあ。仕事は上手くいくし、色々な

疑問は解決したし。

浮かれて、寿幸は控え室の中で思わずスキップしてしまう。
そのテンションを保ったまま、彼は帰宅しようと控え室を飛び出した。

力強く扉を開け、廊下へと出る。と。

「きゃっ」

勢いよく開けたドアが、廊下にいた人にぶつかった。

その衝動で、ぶつかった人は尻餅を突いて転んでしまったらしい。

「う、うわ。すみません！」

慌てて寿幸は、手を貸してその倒れた人物を助け起こそうとする。
しかし、その相手の顔を見て、寿幸は凍り付いてしまった。

「え、ま、ま、マジで……?! な、な、な、な、なんでここに……!」

そこにいたのは、先ほど寿幸が精液をかけた相手――。
そして憧れの存在である、アイドル女優、神藤美佳だった。

同じ撮影スタジオにいるのだから廊下に神藤美佳がいたところで、
何も不思議ではない。
ただ寿幸は、憧れの人が目の前にいてすっかり気が動転してしまった。

頭の中がパニックになり、冷静な思考などどこかに飛んでいってしまふ。

「つたた……。つて、あ！ あんた！」

美佳が、寿幸を見て指をさした。

「2連続失敗君じゃん！」

なんとも不名誉な名前がつけられていたものだ。

だが寿幸はそれ以上に、自分のことを美佳が知っていたのが信じられなかった。

普通に考えればこれまで既に3回も一緒に仕事をしているんだし、さつきにいたっては目を合わせながら射精までしたのだ。美佳が寿幸のことを覚えていてもなんら不思議ではなかった。

だが彼にとつては、たとえ3回一緒に仕事をしようとも、神藤美佳はまだあこがれの対象であつて、会話なんて出来るような存在ではないのだ。

事実、下っ端の汁男優と女優が撮影中以外で直接言葉を交わすことなど、ほとんどないだろう。

「あ、え、えーと。そ、そうです！ 2連続で失敗しました！ お、覚えててくれたんですね……」

よく意味の分からない感謝をしながら、とにかく寿幸は美佳を助け起こす。

「まったく、気をつけてよねー。女優の体に傷でもつけたら、あんたここじゃやっていけないよ」

スカートの埃を払いながら、美佳は冗談っぽくそう言った。だが、それを冗談と受け止める余裕もない寿幸は、「すみません…

…」としゅんとしてしまう。

その様子を見て美佳は、「冗談よ」と笑った。

「にしても、良かったよねあんだ。今日初めてお金もらえたんじゃないの？」

「あ、はい！ おかげさまで今日は成功しました。ご存知だったんですね……」

自分の仕事を神藤美佳が見ていた。

それだけで、寿幸の胸はいっぱいになってしまう。

「そりゃまあ、あたしがかけられてるんだからね……」

呆れたように、美佳は言った。

「あ、いや、その通りです。はい、すいません」と、寿幸はもごもごと口の中で呟く。

そうだ、自分は目の前にいるこの少女に精液をかけたのだ。

彼女の見ている前で性器をいじって、興奮を得て。

それを考えると寿幸は急に気恥ずかしくなってきた。赤面してしまい、俯いてしまった。

そんな寿幸を下から覗き込み、「変なヤツ」と美佳が容赦ない言葉を浴びせかけてくる。

「まああたし、まだ次の撮影があるから行くね。もらったお金でいいもん食べなよ」

「あ、はい！ ありがとうございます！」

あんなにハードな撮影が終わっても、まだ別の撮影が続くのか――。
目の前にいる小さな体の少女が、それを頑張っている。
そう考えると、寿幸はなんだか嬉しくなってしまう。

「ホント変わってるよねあんだ。別にあたしより年上なんだから、
敬語なんて使わなくていいのに」

「い、いや、俺、ファンだったし、その、下っ端だから――」

しどろもどろに言う寿幸に、笑いながら美佳は言った。

「まあでも、変わってるけどなんか面白いし、また時間ある時にで
も話そうね。ほら、ここさ、年の近い人いないから」

そう言い残すと、美佳は行ってしまった。

しかし寿幸は、その場に固まったまましばらく動けない。

美佳の言葉が信じられなかった。

「また話そうね」って、俺と？ お、俺と……？

実感が湧いて来ない。

だけど、頭の中で寿幸は、その言葉を何度も何度も反芻した。

「うつひょー！」

さっきよりもさらに軽快なスキップで廊下を駆け抜け、スタジオを
飛び出す。

やっぱり思った通り、今日は最高の日だった。それもとびっきりの
――。

下手くそなスキップで足が絡み、道路に出た瞬間手を突いて転んでしまった。

だけどそれすらも、寿幸はなんだか楽しくてたまらなかった。

第七話

廊下で偶然話をして以来、美佳はその青年とたびたび言葉を交わすようになっていた。

と言っても美佳が撮影の仕事をするのは大体週に1回くらいだし、青年とも毎回現場で会うわけではないから、話すのはせいぜい月に3、4回、それも10分足らずのものだ。

それでも、初めて会話してから3ヶ月ほど過ぎて桜の季節になる頃には、青年からも以前のおどとした態度は随分消えていた。ただし、依然として敬語で話してくるのは変わらなかったが。

最初のほうこそ美佳は、面白半分のからかいのつもりで会話しているだけだった。

いくら年が近いとは言っても、所詮は男優を志望するような男だ。話なんて合うわけがない。

そう思っていたが、何かの弾みで美佳が最近読んだ本の話をしたとき、青年はそれらを読んでいただけではなく、美佳と同じような感想を抱いているのが分かった。

「へー、あんた本なんか読むんだ？」

何気なく美佳が言ったその言葉に、「本だけじゃなく、絵画も好きです。建築や演劇も……。芸術的なものには、何でも興味があります」と、照れくさそうにだが力強く答えたその表情がなんだか印象的だった。

それに、美佳が青年に親近感を抱く理由はもう一つあった。大抵の男優は話していたら、すぐにプライベートでも関係を持ちた

がろうとする。

やれ二言目には、「今度遊びにいこう」「彼氏いないんだろ」といった類のことばかり。

その言葉からは、「仕事で不特定多数の男にやらせてるんだから、別にいくらだってやらせてくれるんだろ？」という下衆な考えが手に取るように伝わってくる。

バーカ。あんたたちがあたしのプライベートにまで入り込んでこられるわけないでしょ。

何も出来ないから男優なんかやってるあんたたちと、目標に向かうためにここにいるあたしは全然違う。

それなのに、同類項でくくられた拳句、まるでおもちゃで遊ぶかのように関係を迫り、馴れ馴れしく接されるのが美佳は死ぬほど嫌だった。

その点青年は違った。

おどおどとしたところが取れてきた最近でさえ、プライベートで美佳を誘ってくることもなんてありえなかったし、下品な話題など絶対に振ってこない。

たまに美佳が冗談めかして、撮影後に、「今日のあたしどうだった？」と聞くと、恥ずかしそうに顔を伏せ、「いや、すごくきれいでした」と消え入るような声で答えるだけ。

人の顔に精液かけときながら、何を今さら恥ずかしがってんだか。そう言っただけで笑い飛ばしたくなるような気持ちもあるが、美佳にとっても青年とのこの感じはなんとなく居心地が良かった。

あいつも、もう少し親しくなっただけの皮がはがれたら、他の男優どもみたいに欲望丸出しであたしに迫ってくんのかな？

最近では男優の仕事だけでなく雑用全般を任され、今も重そうな機

材をかつてスタジオの中を右往左往している青年の姿を眺めながら、美佳は考えてみた。

だけど、なんとなくだけど、あいつに限ってそんなことはありえないような気がした。

青年と会話をする理由が、いつの間にか面白半分の気持ちよりも彼への興味のほうが勝ってきていることを、美佳は感じていた。

美佳の最近のお気に入りの作家は、谷崎潤一郎だ。

独特の美を追求して文学にまで昇華するそのスタイルが美佳は好きだった。

その美は、一言でいうと歪だった。歪な愛、歪な性癖、歪な生き方。だけどそれらを自分自身の強い信念で美しいと言い切り、文章にすることによってそんな自分の価値観さえも大勢の人々に伝えることが出来る。

表現というものの根本を、改めて感じさせられた気がした。

だが今日は、そんな谷崎の本を読んでいてもなんだか集中できない。さっきまでは勉強していたのだが、それもあまり頭に入ってこない。そこで中断してしまった。

ならば本なら、と思ったがどうやらこちらもだめだったらしい。

最近撮影の回数が増えているから、体が随分と疲れているのかもしれない。

もういつの頃からか忘れたが、ずっと微熱が続いているような気がする。

と言っても今までは勉強や読書の集中を妨げられるほどではなかったから、ひどくなってきたのだとしたらちよつと問題だ。いず

れきちゃんと病院に行ったほうがいいかもしれない。

「あー」

伸びながら、机の上の時計を見てみた。19時3分。

体の調子が良くないとは言え、さすがにまだ寝る気にはなれない。

こうなると、美佳はすっかり困ってしまう。勉強か読書、この2つを除くと美佳には趣味らしい趣味なんてものが何もなかった。

気軽に遊べる友達もいないから、誰かを誘ってご飯を食べに行くようなことも出来ない。

無我夢中で勉強や撮影をしているときは何も思わないが、こうしてたまにふっと我に返ると自分自身の孤独さに少し寂しくなってしまう。

「まあ、慣れてるんだけどね」

1人暮らしを始めてから、独り言の割合がかなり増えてしまった気がする。

それが寂しさを紛らわすためなんだとしたら、あたしってちょっと悲しいヤツかもしれない。

どうしようかと椅子にもたれかかって考えていると、ふと閃いた。

そうだ、あいつを呼んでみよう。例の青年の顔が頭に浮かぶ。

撮影現場以外で会うなんて初めてのことだったが、あいつとなら一緒にご飯に行ったとしても気兼ねなく会話をして時間が潰せるだろう。

しかしひとつだけ困ったことがあった。

呼び出そうにも、美佳はその青年の連絡先を知らないのだ。

「うーん」

少し逡巡した後、美佳は受話器に手を伸ばしてダイヤルを回した。数コールの後つながったのは、自分が所属する事務所の社長の電話だ。

「もしもし、あたしだけど」

「おう、どうした？」

「あのさ、最近現場に出入りしてる20歳ちょっと過ぎぐらいの男の人って分かる？ 気の弱そうな青年」

「ああ、あいつか。分かるけど、どうした？」

社長の話によると、彼はその真面目な働きっぷりで色んな人から良い評価を受け、最近めきめきと頭角を現してきているらしい。

なんとなく聞くタイミングを逃してしまったため美佳は青年の名前をいまだに知らなかったが、社長にすぐに分かってもらえたので助かった。

青年のまじめな働きに美佳は心の中で少し感謝する。

「いやー、実はさ、あの人んちの電話番号教えてほしいんだよね」

「は？ あいつのか？」

案の定社長の語気が少し強くなる。

「そうそう、別にいいでしょ？ 悪用しよってわけじゃないんだし」

「そうはいかないだろ。俺だって勝手に人の電話番号を教えるわけにはいかないし、男優と女優のあいだで何か問題があっても困る」

「何も問題とかないつて。ちょっと電話で聞きたいことがあるだけだから、どうしても電話番号知りたいの。ね？　お願い」

「ダメだ」

もう、相変わらず頭の固いおっさんなんだから。

予想通りの結果とは言え、取り付く島もないその言い方に美佳は思わずため息を漏らしてしまう。

えーい、こうなったら仕方ない。最後の手段だとばかりに、美佳は奥の手を繰り出した。

「じゃあもういい。あたし仕事やめる」

その言葉を聞いた途端に、社長が焦りだす。

この会社の収益の結構な割合を、自分のビデオの売り上げが占めていることを美佳は知っていた。

そんなところに付け込むなんて我ながら卑怯なやり方かもしれないが、背に腹はかえられない。

「わ、わかったわかった。じゃあ教えるが、いいか。くれぐれもおかしなことはするんじゃないぞ」

「はいはい、わかってるって」

教えてもらった電話番号を近くにあったメモ用紙にすらすらと書き記し、美佳は電話を切った。

まるで清纯派アイドルでも扱うような社長の態度に呆れながら、教えてもらったばかりの電話番号のダイヤルを回す。

「いきなり電話かけたらびっくりするかなあいつ」

よし。ちよつと意地悪して、自分が誰なのか名乗らないでかけてやろう。

青年の驚き慌てふためく様子が頭の中に浮かんでくる。

たったそれだけのことで顔をほころばせている自分に少し腹が立って、えいっとばかりに美佳は軽く頬をつねった。

第八話

2人でファミレスに入り、向かい合わせの席に座っても、寿幸はまだ夢の中にいるような気分だった。

美佳から手渡されたメニューをぎこちない手つきでぱらぱらと捲るが、内容がまるで頭の中に入っていない。

「あたしハンバーグドリアにしよう。あんたは？」

美佳のその声でやっと我に返り、「あ、じゃあトンカツ御膳で……」となんとか返事をするのは出来たものの、これから何を話せばいいのだろうかと考えると余計に緊張が高まってくる。

今から約30分ほど前。

携帯にかかってきた知らない番号に出るまでは、まさかこんなことになるなんて思ってもいなかった。

何気なく出た電話の相手が神藤美佳だと分かった時に受けたあの衝撃は、しばらく忘れることが出来ないだろう。

それだけでも十分驚きだというのに、あろうことか食事にも誘われてしまったのだ。

確かに最近、撮影現場では美佳と言葉を交わす回数が多くなってきた。

だが所詮それは、美佳にとっては単なる暇つぶしに過ぎないのだということは分かっている。

分かっているからこそ、変な期待を抱いてしまわないように必死に自分に言い聞かせてきた。

なのに、こんな風に誘われてしまったりすると否が応でも色んなこ

とを考えてしまう。

単細胞な自分がつくづく嫌になるが、電話を切った直後から上がりっぱなしの心拍数は一向に収まる気配がなかった。

「普段とかご飯ってどうしてんの？ 1人暮らしなんでしょ？」

しかし美佳は、そんな寿幸の内心の葛藤などまるで気がつかないかのようにいつも通りの調子で話しかけてくる。

勝手に身構えて緊張している自分が悪いのだが、少し拍子抜けするような気分だった。

だがそのおかげで、何を話せばいいのだろうかという寿幸の心配は杞憂に終わったらしい。

注文したメニューが運ばれてきてそれを食べている間中ずっと、美佳は1人で喋りっぱなしだった。

それに相槌さえ打っていたら会話は進んでいくので、妙な間が空いて気まづくなってしまうということもない。

ひとまず最悪の事態はまぬがれたことに、寿幸はホッと胸を撫で下ろす。

トンカツが残り一切れになる頃には、あんなに感じていた緊張もいつの間にか随分和らいでいた。

それから色々な雑談で盛り上がり、店に入ってちょうど1時間ほどが過ぎた頃のことだった。

喋るのを一旦止め、食後の大盛りフルーツパフェと格闘していた美佳が、「そーいやさ」と唐突に口を開く。

「あんたって、なんで男優になんかなろうと思ったの？」

ついさつきまでは昨夜見たテレビ番組について熱く語っていたのに、不意にそんなことを聞かれて寿幸は戸惑ってしまう。

もちろん、答えられない質問ではなかった。

玄さんから学んだ、「誇りを持つ」ということ。

「大空を泳ぐ魚」を見て受けた感銘。

そして、自己を表現したいという衝動――。

この道を選んだ理由なんて、それこそ朝までも語り通せる自信があった。

だが、この場がファミレスであるということや、もしかしたらそんな自分の考えなど美佳に鼻で笑い飛ばされてしまうのではないかという不安が、つい寿幸にその場凌ぎの曖昧な返事をさせていた。

「いや、まあなんとなく……です」

我ながら呆れてしまう答えだ、と寿幸は思った。

美佳もその返事には満足できないのか、「ふーん」とつまらなさそうに口をとがらせている。

やばい、このままじゃ会話が止まってしまう！

焦った寿幸は、慌てて言葉を続けた。

「美佳さんは、どうしてこの仕事を選ばれたんですか？」

だが、言うてから後悔した。

女性に向かって、「なんでAV女優をしてるんですか？」という質問はないだろう。

誰だって多かれ少なかれ様々な事情があるに違いないのに、そんなことを根掘り葉掘り聞かれていい気のする者などいるはずがない。

怒らせてしまったらどうか……？

恐る恐る、寿幸は美香の顔を覗き見る。

だが美佳は、そんな寿幸に小さく微笑みかけ、

「あたしもなんとなく、かな」

と冗談めかして答えた。

良かった。どうやら怒ってはいないらしい。

「変なこと聞いてしまってますいませんでした」と謝ろうとする寿幸の言葉を遮り、「いや、あたしから聞いたんだし。わけわかんないことで謝んなくていいよ。それよりさー」と、さっきのやり取りなどまるで気にしていない様子で話し始める。

結局それから約2時間、美佳は撮影現場で誰が一番気に食わないかということについて延々と語り続けた。

11時近くになってファミレスを出ると、もうすぐ5月だというのは外は随分と肌寒かった。

「うー、なんか今年は寒いね」と言いながら、美佳はミニスカートから伸びる太ももを懸命に両手で撫でている。

「じゃああたしんちすぐ近くだから、ここでお別れだね。気をつけて帰るよ」

これからどうします——？

と切り出す前にあっさりと美香に先手を打たれてしまい、寿幸は心の中で思わず苦笑する。

だけどこれでいい。

今の自分には美佳を誘う度胸なんてないし、資格もない。
美佳と一緒に2人で食事に行った。それだけで寿幸にとっては十分すぎるほど幸せだった。

「ええ。美佳さんも、近くとは言え夜ですから気をつけて」

「うん、今日はありがとね。楽しかったよ。またご飯行こうね」

バイバイと、大きく手を振りながら人ごみの中に美佳は消えていく。
小さくなっていくその影を、寿幸はただ黙って見送った。

「またご飯行こうね、か」

夢みたいな言葉だった。この世界に入るまでは、考えも出来ないことだっただろう。

初めて美佳と会話した時と同じように、スキップで帰りたいほど嬉しいはずだった。

だけど今の寿幸は、どうしてもそんな気分にはなれなかった。

あたしもなんとなく、かな――

あの時。

冗談交じりでそう答えた美佳が、笑顔の裏にふと見せた寂しげな表情が脳裏に焼きついて消えなかった。

寂しさと虚しさのようなものが入り混じったその顔は、今まで自分が見てきた美佳のどの表情とも違っていた。

もちろん自分は、美佳のことなんてまだ半分も知りはないだろう。

ただどあんな顔は、美佳には似合わないと思った。

俺はいつか、その寂しさの原因を取り除いてやることが出来るだろうか――？

分からなかった。

そしてそれが、なんだかやけに悔しくてたまらなかった。

神藤美佳が突然撮影を休んだのは、それから1ヶ月ほどが過ぎたある日のことだった。

第九話

体がおかしい。

青年とご飯を食べに行ったあの日に感じていた微熱が、1カ月経つた今になっても一向に下がらない。

いや、実際に熱があつたのはそれ以前からだから、もう1ヶ月半か2ヶ月かそれくらいずっと微熱が続いていることになる。

「あたしの体、どうしちゃったんだろう……」

性感染症や妊娠については定期的に検診を受けているから、その可能性はないはずだ。

だとしたら、原因はそれ以外の何か――。

とにかくもう、忙しいなどと言っている場合ではない。

すぐにでも病院に行くべきだ、と美佳は思った。

近頃は、熱があるだけではなく体全体がむくんでいるような感じがするし、なぜか歯を磨いただけで歯茎から血が溢れた。

些細な症状ではあるけれど、自分の身に何かが起きているのは確かだろう。

だが美佳が、何かがおかしいと思いながらも今日まで病院に行くことをためらったのには理由があつた。

怖かつたのだ。

治療を受けることがではない。

もし何か自分がとんでもない病気にかかっている、それを目の前に突きつけられることになったらと思うと、怖くて仕方がなかった。

せつかくここまで来て、頑張ってお金だって貯めたのに長期の入院なんて目にあうなんて絶対にいやだ。

今のあたしには、立ち止まっている暇なんて少しもない。

どうか、普通の風邪か単なる疲労の蓄積が原因でありますように。

明日とうとう病院に行こうと決意したその日の夜、普段は神様なんて信じないのに、美佳は必死で何かに祈った。

お願いです。お願いだから、せめてあたしに普通の人生を歩ませてください――。

だけどそんな願いなんて誰にも届かない気がして、無意識のうちに震えてしまう自分の体を美佳は強く抱きしめた。

翌日。

病院から帰ってきて、美佳は力なくベッドに倒れこんだ。

腰に刺された注射の跡が、ずきずきと重く痛む。

「黒いよ……」

力ない声で、ぽつりと呟く。

病院で診察を受けてからずっと、頭の中を濃い黒色が支配していた。

そうだ。黒だ。真っ黒だ。

あたしの人生はきっとそんな色だ。美佳は思った。

だから光が差し込みかけても、深い深い黒色の前に全部かき消されてしまうんだ。

「症状から判断すると、慢性骨髄性白血病の可能性があります」

その医師の言葉が、美佳にはどうしても現実のものだと思えなかった。思いたくなかった。

安っぽいメロドラマなんかでヒロインが都合よく死ぬ時に使われる病名――。

白血病に対する美佳のイメージは、その程度のものだった。

お涙頂戴の盛り上げ役に使われてるような病気に、あたしがかかってるかもしれない？

突然そんなことを言われても、信じられるはずがなかった。

だって、あたしは別に元気だよ。

熱はあるけど、体はむくむけど、歯茎からよく血は出るけど、こうして家で1人で生活だってできてるよ。

白血病？ かかったら死んじゃうかもしれない病気？

そんなわけない。そんなわけがない。

大丈夫、今はちよつと調子が悪いだけ――。

その症状が、たまたま白血病の症状と似ちゃってるだけだ。

あたしはきつと、大学に行く。大学に行って、文学を勉強するんだ。

湧き上がってくる絶望や恐怖を必死に押さえつけるように、美佳は自分に何度も何度も言い聞かせた。

だけど、前まではあんなにはつきりと想像できていた大学に通っている自分の姿が、光差すフィールドにいる自分の姿が、まるで墨汁でぐちゃぐちゃに塗りつぶされたみたいに霞んでしか見えなかった。黒い。黒い。あたしが頑張ったことが全部、真っ黒になって消えていってしまう。

もしもだけど、もしも今死んだら、自分はただのAV女優として人

生を終えてしまっただろうか？
名前も知らない男に抱かれて、その姿を不特定多数の人に見せて、
それであたしの人生が終わり？

「違う——！ あたしはAV女優なんかじゃない！！」

思わず声に出して叫びながら、美佳は枕を床に向かって思いっきり
投げつけた。

そんなのありえない。ありえちゃいけない。

AV女優なんて、なりたくなかった。そんな仕事大嫌いだった。
だけど大学に行くために、誇りを持った自分になるためのステップ
だから仕方なくやった。

水商売が最終地点だなんて、そんなあの女と一緒にだ。あたしが一
番軽蔑するあの女の人生と同じ。

嫌だそんなの。あたしは大学に行くんだ。勉強をたくさんして、学
者にだってなるんだ。小説を書いて、作家にもなりたい。

死ぬかもしれないことは怖かった。

白血病なんて病気は冗談にしか聞こえなかったし、まだ全然信じて
なんかいなかったけど、それでもやっぱり怖かった。

だけどそれ以上に、自分がつまらない自分のままで終わってしまう
ことが美佳は何よりも恐ろしかった。

骨髄の検査をするために、腰から注射を打って骨髄の血を採った。
白血病細胞は骨髄の中で増えるから、その血を調べることで本当に
白血病かどうかはつきりするらしい。

検査の結果が出るまでの3日間、元々仕事も休みの予定だった美佳
は、勉強をするでもなく読書をするでもなく、ただ全てが何かの間
違いであるように祈りながら家の中で過ごした。

祈ることが無駄なことなんてもう十分すぎるほど分かっていたはずなのに、それでも何かに祈られずにはいらなかった。

しかし3日後に出た検査結果は、美佳が半ば予想していた通りのものだった。

黒色が、さらに濃くなっていく。差し込みかけていた光はもう、完全に塗りつぶされてしまっていた。

「淫売の子は、淫売にしかねない——」

大嫌いな言葉が、頭の中を駆け巡って消えなかった。

嫌だ、あたしは頑張ってる、頑張ってるのに。違うあたしになろうとしてるのに。

どうしてたったそれだけの事さえも許されないんだろう。

あたしはただ、他のみんなと同じように普通の人生を生きてみたいだけなのに——。

翌日、美佳は初めて撮影の仕事を休んだ。

そしてもう、自分がAV女優の仕事をすることは二度とないだろうと美佳は思った。

せめて最期くらいは、そんな汚い自分でいなくてもいいように。

だけど分かっていた。

そんなことをしたところで、今死んでしまったら自分はただの体を売っていただけの女。

無気力で、向上心がなくて、ただ楽にお金を稼げて生きてさえいられればいいような恥知らずなヤツ。

きっとみんなは、そう思ってたあたしのことを見るのだろう。

「大学に行くまで、あたしは生きていられるかな――」

呟く自分の声が、どこか遠くで聞こえる。

なんだか無性に、あの青年に会いたかった。

第十話

「今日もダメか……」

スタッフの間から、ため息交じりの声が漏れる。

神藤美佳が撮影に来なくなってから、今日でもう2週間が経過していた。

事務所側の説明によると、体調不良が原因らしい。

そのため、初めて休んだ日の1週間後に改めて撮影の予定が組まれていたのだが、結局その日も美佳は来なかった。

そしてそれから更に1週間が経った今日。

撮影は14時スタートのはずだったが、もう時間を大幅に超えてしまっている。

今度こそちゃんと来れるという話だったのだが、この様子だとスタッフたちが言っているように今日も恐らくダメだろう。

そのたびに事前に行っていた準備が全て無駄になるし、人件費だって馬鹿にならない。

だけど寿幸にはそんなことは関係ないし、毎回現場に来て無駄足を踏まされることにも怒りなんて感じなかった。

それよりも、美佳の体調が心配でならなかった。

2週間経っても出て来られないなんて、一体どんな病気にかかってしまっているのだろうか。

食事に誘われてから、美香が撮影を休むまでの1カ月間。

たまに現場で顔を合わせて会話をすることはあったが、特におかしな様子は見受けられなかった。

突然重い病気にかかってしまったのか、それとも怪我でもしたのだろうか。

だけど、いくら心配したところで寿幸にはどうすることもできなかった。

電話番号は食事に行った時にかかってきた際の着信履歴をこっそり登録しておいたので分かるが、だからと言って自分がかけたところで何かが解決するとは思えないし、突然電話して迷惑がられたらと思うと、とてもそんなことは出来なかった。

「はあー……」

大きなため息をつきながら、寿幸は控え室の机に突っ伏した。

最近仕事ではミスをしていないのでこの机とも随分ご無沙汰だったが、こうしていると少々感慨深いものがある。

確か、初めての仕事で失敗したときにこうやってたら玄さんに声をかけられたんだな……。

「よう」

そんな回想に寿幸が耽っていると、頭上から声が聞こえてきた。その主は、言わずもがなである。

「あ、ど、どうも。なんかいつも控え室でお会いしますね」

まるで頭の中を覗かれたかのようなタイミングでの登場に、少し動揺しながら寿幸は挨拶した。

そんな寿幸に呆れた様子で、玄さんは言った。

「何言っただ、控え室なんだから男優がいて当たり前だろ。それ

よりお前、こんなところでポーズとしてないで嬢ちゃんの見舞いに行ってこい」

「はい……？」

玄さんが嬢ちゃんと言ってるのは、神藤美佳のことで間違いないだろう。

だけど見舞いって、なんで俺が……？

事務所の社長が直接家に行っても、「今は体がつらいから誰にも会いたくない」と美佳にずっと門前払いされているらしいのだ。自分なんかが行っても意味がないことなど、少し考えたら分かることだろう。

玄さんの真意が掴みきれず、寿幸は戸惑った。

「お前ら仲いいらしいじゃねーか。飯にも行っただって聞いたぜ」

「え！ いや、あれはたまたま……っていうか、なんで知ってるんですかそんなの？！」

美佳が誰かに言ったのだろうか。

玄さんの口振りだと、随分と噂になっているような雰囲気だ。

下っ端の新人が女優と2人で食事だなんて、あまり先輩たちには知られないほうがいい情報であることは間違いない。

だが玄さんはそんなことなど一向に意に介する様子もなく、事も無げに言葉を続けた。

「まあいいんだよそんなのはどうでも。それより、さっさと見舞いに行ってこい。このままだと撮影がすすまねーだろうが」

「いや、だって俺が行って体調不良が治るわけじゃないし、俺よりももっと事務所の人とかが行ったほうが……」

「嬢ちゃんくらいの歳のヤツは、中年のおっさんに見舞いに来られるよりもお前みたいなのが来るほうが嬉しいんだよ。いいから文句言っでないで行ってこい」

「は、はあ……」

有無を言わせぬ勢いで、玄さんが言う。

それに押し切られる形になってしまったが、寿幸は心の中でこっそりガッツポーズを取る。

形はどうあれ先輩に指示されたのだから、これで堂々とお見舞いに行くことが出来る。

さつきまで、自分には何も出来ないと悩んでいたのがウソみたいだった。

「あ、でもお見舞いって言っても美佳さんは自宅で療養してるんですよね？ 俺、家とか分からないですよ」

「そんなもん、事務所の人間か誰かに教えてもらえ」

「はあ……。でも、家に行っちゃってもいいんですか……？」

「別に、病人の家に押しかけて何かする気でもねーだろ」

「それはもちろんそうですけど、いきなり言ったら怒られるだろうし門前払いされちゃうんじゃない……」

「そんな気になるなら、電話かけてから行けばいいだろ。電話番号、

知ってんだろ？」

願ってもない状況に、寿幸は思わず小躍りしてしまいそうになる。しかしそんな自分を、寿幸は慌てて諫めた。

美佳は病気で苦しんでいるのだ。

なのに、なし崩し的に家に行けることになっただけで浮かれてしまっていてはいけない。

「分かりました。じゃあ、携帯にかけてみます」

「おう」

控え室から出てからかけようか少し迷ったが、なんだかこそそしているような気がしたのでここでかけてしまうことにする。

緊張しながら発信ボタンを押すと、数コール後電話がつながった。

「もしもし」

「あ、も、もしもし！ 美佳さんでしょうか？！」

「あ、うん。あんたか。どしたの？」

「い、いや、どうしたっていうか、その、お体のほうは大丈夫かなあと思っています」

美佳と電話をするのは食事に誘われた時以来だから、どうしても緊張して声がうわずってしまふ。

だが、想像していたよりも美佳の声は元気そうだったので寿幸は少し安心した。

「あーうん、ちょっと調子が良くなくてさ。まあ、心配してくれてありがとね。それで、どしたの？」

「いや、それですね、男優の先輩に言われたんですけど、お見舞いに伺わせていただいてもよいかな……と」

寿幸は「先輩に言われた」の部分を少し強めに発音しながら、美佳にお見舞いに行きたいという旨を伝えた。

「あ、いいよ、来てくれるんだ。家分かる？」

「え、いいんですか！」

やけにあつさと承諾されてしまい、断られるかもしれないことを覚悟していた寿幸は思わず間抜けな声を上げてしまう。

「別にいいけど。あんたが1人で来るんでしょ？」

「あ、はい。そのつもりです」

「じゃあいいよ。あんまり大勢で来られたらやだけどさ。それで、家は分かるの？」

「えーと、誰かに聞くからそれは大丈夫です。じゃあ、今から準備して出ますんで！」

「わかったー。待ってるね」

電話を切ってほっと一息つくと、玄さんがなんだかニヤニヤしながらこつちを見ていることに気づいた。

「な、なんですか？」

「いや、上手くいったみてーじゃねーか。それにしてもお前、年下の嬢ちゃんに敬語で話すんだな」

なるほど、それを聞いて笑っていたのか。

納得しながら、寿幸は「いやー、下っ端なんで」と言い訳した。

「まあ気持ちは分かるけどな。じゃあ、家の場所聞いてさっさと行つてきな」

玄さんにせかされるように身支度を整え、寿幸は控え室を出ると、その寿幸の背中を玄さんが慌てた様子で呼び止めた。

「ちょっと待った」

「え？」

振り返ると、玄さんが手に何かを持っていた。

「これ、持っていきな」

「え……これって……」

言いながら玄さんが寿幸に手渡してきたのは、「大空を泳ぐ魚」のDVDだった。

今から見舞いに行こうとしているのに、なんでアダルトDVDなんか渡してくるんだらうこの人は……？

訳が分からず、寿幸の頭の中はクエスチョンマークでいっぱいにな

った。

「いいから持つてけ。こんなもんでも、もしかしたら役に立つかもしれないねーだろ」

「で、でも、お見舞いに行くんですよ？ まあ家で退屈してるかもしれないけど、どうせなら洋画のDVDとかの方が喜ばれるんじゃないですか？ いや、別に『大空を泳ぐ魚』の作品性を否定してるわけじゃなくて、あくまでお見舞い品としてはっていう話ですけど」

混乱しながら言う寿幸の頭を、玄さんが丸めた拳で軽く小突く。

「黙って持つてけよ。そんなかさ張るもんでもないだろ」

「はあ……。わかりました」

渋々ながら、寿幸はそれをバッグにしまいこむ。

そんな寿幸の態度が気に入らなかったのか、玄さんは意味ありげにこう言った。

「なあ若いの。さっきから嬢ちゃんの体のことをずっと心配してるが、本当にどこか悪いんだと思うか？」

「え……？ だってそうなんですよね？ 事務所の人もそう言うてるし……」

「バーカ。断言しといてやる。嬢ちゃんは仮病だ——」

そう言うて玄さんは、口の端をニヤリと歪めた。

第十一話

あの青年に会いたい――。

死ぬかもしれない病気にかって、それで男に会いたいだなんて、我ながらなんて陳腐なんだろう。

ただあの人ならきつと、あたしがただのAV女優なんかじゃないってことを分かってくれる。

真っ暗な部屋の隅っこで膝を抱えて座りながら、美佳はそう思った。

食事に誘った時に社長から聞いた電話番号のメモは、今も捨てずに置いてある。

ダイヤルに指をかけ、美佳はゆっくりとそれを回した――。

第十二話

カチャリ、と音を立ててコーヒークップが目の前に置かれる。寿幸は小さくなって、「ど、どうも」と軽く頭を下げた。

「ううん、こっちこそわざわざ来てくれてありがとね」

言いながら、神藤美佳がテーブルを挟んだ向かい側に腰を下ろす。1カ月前前に食事をした時と同じ構図だ。

ただしあの時と決定的に違うのは、ここが美佳の自室であるということだった。

それを意識しただけで、寿幸の心臓はどんどん高鳴ってしまふ。

「い、いえ。いきなり押しかけるみたいになっちゃってすいません。それで、お体の方は大丈夫ですか……？」

控え室を出る間際に玄さんが言った「仮病」という言葉が気にはなつたが、寿幸はそれを信じてはいなかった。

いや、それどころかむしろ怒りさえ感じたほどだ。

美佳さん自身が体調不良だと言って休んでるのに、なんで何の根拠もなく決めつけるんだ――。

玄さんのことは尊敬しているが、あまりに理不尽な言い方に寿幸は反発を覚えた。

しかしそんな寿幸の怒りは、どうやら見当違いのものだったらしい。

「うーん……。あのね。怒らないで聞いて欲しいんだけどさ、実は体調不良っていうのはウソなんだ」

小さく舌を出しながら謝る美佳を、寿幸は目を丸くして呆然と見つめた。

「え、う、ウソって、じゃあ体調は悪くないってことですか……？」

「うん……。ごめんね……」

本当に悪いと思っているのだろう。

視線をコーヒークップの上に彷徨わせて、小さく消え入るような声で美佳が言う。

自分が怒っていると思わせてしまったのかと気づき、寿幸は慌ててフォローした。

「い、いや、別に俺は全然いいですよ！　むしろ、お体が何もなかったのなら安心です」

心の中で玄さんに謝りながら、あたふたと美香を気遣う言葉を口にする。

だが美佳はそれを聞いているのかいないのか、視線を落としたまま小さく頷くだけだった。

やばい……。お見舞いに来たはずなのに、嫌な気分させてどうするんだ。

いや、体は悪くないらしいからお見舞いって言葉はおかしいのかな？　って、そんなことはどうでもいいよ！　なんとかしなきゃ！

焦り、落ち着きなく視線を室内に彷徨わせながら寿幸は頭をフル回転させた。

どうする。どうすればいいんだ俺。いや、まずは落ち着け。

病気じゃなかったんならそれでいいじゃないか。とにかく、仮病だったことでなんて怒っていないということをちゃんと伝えるんだ。

「ホントに俺、怒ったりしてませんから！ 他のスタッフたちだってきつと、何か事情があつたんなら分かってくれますよ。大丈夫ですから」

「うん、ありがと……。だけど、あたしのわがまままで迷惑かけたのはごめんね」

「いえ、いいんですよそんなの——」

悲しげに目を伏せる美佳の表情からは、ただ単にウソをついたことを悔いるだけではない何かが伺われた。

その寂しそうな顔は、どこかで見たことがある。いや、見たことがあるなどというものではない。

脳裏に焼きつき、あの日からずっと寿幸が忘れられない顔——。

（あたしもなんとなく、かな——）

それは、ファミレスでそう呟いた時の美佳の表情と同じだった。

そんな美佳を前にしていると、なんだか言葉を続けるのがとても罪深いことのような気がして、寿幸は黙り込んだ。

しばらく、部屋の中を沈黙が支配する。
数分後。

「あたしね——」

その沈黙を、美佳が破った。

「あたしにはね、何も無いんだ——」

泣き笑いのような顔を浮かべて、美佳が顔を上げた。

何と返せばいいか分からず、寿幸は黙ってその言葉を聞いた。

「夢だって、目標だって何にもない。ＡＶ女優にもね、スカウトされてさ。始めはお小遣い稼ぎのつもりでやってたんだけど、アイドルとか言ってみんながちゃほやしてくるから気分良くてなんとなく今までやってた。ただそれだけ……」

初めて聞く話だった。

なんとなく——。

美佳のその言葉が心に響く。

「だけどき、なんか分からなくなっちゃったんだ。エッチしてさ、それをカメラで撮られて平気な顔してて。頭おかしいじゃん？ よく考えたら。お金とか、ちよつとの人気とか、そんなことのために何してんだろうあたし、って。こんな仕事してるなんて、親にだって、友達にだって言えないよ。言えるわけない。一体いつまでこんなことしてるんだろうって、そんな風に考え出すと止まらなかった。そしたら、撮影に行くのも段々嫌になってきて——」

一気に喋って喉が渴いたのか、一旦言葉を止め美佳はコーヒーを一口すすった。

「前にご飯行った時のこと、覚えてる？ あたし聞いたよね。あんたがどうして男優なんかやってんのか、って」

「ええ」

「それもね、あんたに聞けばあたしのこの今の疑問が解決するかなーって思ったからなんだ。もしあんたが、何かちゃんとした理由があつてこの仕事をしてるなら、あたしもそれ、真似できるようになれるかなって」

美佳の言葉に、寿幸は驚く。

まさかそんなことを美佳が考えていただなんて、想像さえしなかった。

彼女は、それだけ悩んだうえで自分にあの質問をしたのだ。

きつと、食事に誘ってくれたのもそれを聞くためだったのだろう。なのに俺は、熱く語るのが恥ずかしいなんて理由で、誤魔化すような返事をしてしまった。

寿幸は、そんな自分の愚かさを恥じ、即座にそれを告白した。

「す、すいません。あの時俺、実は嘘をついたんです」

「え？」

「変に真面目に答えたら美佳さんが引いてしまうんじゃないかな、とかそんな風に考えてしまつて……いえ、とにかく俺は嘘について返事を誤魔化してしまいました……すいません！」

「じゃあ、なんとなくじゃなくてちゃんと理由があるってこと？」

「はい」

「お金に困ってる、とかじゃなくて？」

「違います。大げさかもしれないけど俺は、信念——のようなものを持ってこの仕事をやっているつもりです」

「へえー。信念、か……。なんかすごいね。それ、聞きたいな」

真剣な表情で、美佳が真っ直ぐに目を見据えてくる。

きつと、今から自分が話す内容が受け入れられなかったら美佳はこの仕事をやめてしまうことになるだろう。

それならば、美佳を納得させられるようなもつともらしい理由をでつちあげて説得するべきなのかもしれないかった。

だけど寿幸は、自分のこの仕事への想いを正直に美佳に全部伝えた。そう思った。

アダルトビデオを通じて、自分という存在を表現したい——そんな価値観が理解してもらえないとは思えない。

けれどもう、体裁を繕うために嘘をつくのは嫌だった。

寿幸は、美佳の視線を正面からしつかりと受け止め、口を開いた。

「俺は——誇りを持っています。この仕事に。自分がAV男優であるということに」

玄さんが自分をお見舞いに来させた理由が分かった気がした。

同時に、美佳のことを仮病だと断言した理由も。

「誇り……?」

真剣な表情のまま、美佳が聞き返す。

その言葉に、寿幸は黙って頷いた。

「だけど美佳さんは、誇りなんて言われてもピンと来ないかもしれません。俺だってそうでした」

「うん、少なくともあたしはそんな気持ちになんてなれないよ」

きつと玄さんは、ずっとこの業界にいて、幾度となくこんなことを経験してきたのだろう。

AV女優をやっている女の子が、仕事に虚しさやくだらなさを感じてやめてしまうということを。

「だけど俺は、この業界にいても本当に素晴らしいものを作ることが出来る人たちがいるんだということを知った。信じられないかもしれないけど、俺、AVを見て感動しちゃったんです。それは、映画や本でさえ味わったことのないようなすごい気分でした」

だから玄さんは、自分にこれを持たせたんだと思う。

「美佳さん、『大空を泳ぐ魚』って知ってますか？」

そう言つて、寿幸はバッグの中からDVDのケースを取り出して美佳に手渡す。

「知らない……。これがその、『大空を泳ぐ魚』？ 今言つてた、あんたが感動したつていうAV？」

「そうです。夢宮綾音つていう、20年ほど前に活躍してた女優さんの作品です」

「ふーん……。聞いたことないな。その人の名前も、『大空を泳ぐ魚』つていうタイトルも」

これを見た美佳が、感動して即座に仕事への復帰を果たすだなんて甘いことは考えていない。

玄さんだって、そんな簡単に事が運ぶとは思っていないだろう。

だからこそ、「もしかしたら役に立つかもしれない」と言ったのだ。

だけどそんなことは寿幸にとってはもうどうでも良かった。

ただ、美佳にこの作品を見て、何か感じてもらえたらそれで十分だった。

そしてあわよくば、俺たちが今いるポルノ業界という場所は、そこまで絶望的なところじゃないということを知って欲しかった。

「俺はこれを見て、ＡＶ作品でも見ている人の魂を揺さぶるようなものを作ることが出来るんだということを学びました。自分もいつかこんなものを作れるようになりたい。そして、俺という存在を表現したい——」

「存在を、表現……」

「俺の信念について聞いてくださるなら、美佳さんもこの『大空を泳ぐ魚』を見てもらえませんか？ たぶん、俺が言いたいことはこの中に全部詰まってると思います」

こんなことはきっと、自分のエゴに過ぎないのだろう。

大人たちがやるように、口八丁手八丁で美佳を言いくるめるのが正しいのかもしれない。

だけど寿幸は、そんなことでは意味がないと思った。

そんなやり方で業界に引き留めたとしても、結局いつかは美佳がこんな仕事をするのが嫌になってしまうことは目に見えている。

それならば、今辞めてしまったほうが100倍いい。

そうではなく、美佳自身が持てるようにならなければいけないのだ。誇りを――。

そんな寿幸の想いが届いたのだろうか。

神妙な面持ちで美佳は頷いた。

「分かった。見てみるね。あんたが体験したすごい感動、あたしも感じてみたい――」

第十三話

ティーカップから立ち上がる湯気が、ゆっくりと天井に向かって昇っていく。

テーブルを挟んだ向かい側にいる青年は、おずおずとそれに手を伸ばした。

「わざわざ来てもらってごめんね」

美佳が言つと、青年は「い、いえ、こちらこそお招きいただきましてありがとうございます」と妙に形式ばった返事をした。いきなり家に呼ばれたことで緊張しているのだろうか。

さきほどから青年は、所在無さに視線をうつろらせている。

何から話せばいいのか分からず、美佳は黙ったまま紅茶にミルクを入れた。

しばらくのあいだ、沈黙が続く。

あたしは――。

あたしは、どうしたいんだろう。

美佳は自分の中に、そんな疑問が生じるのを感じていた。

とにかく青年に会いたかった。

会って、伝えたいことがたくさんあるはずだった。

しかしいざ青年を目の前にすると、本当は何を伝えたいのかがよく分からなくなる。

あたしは白血病で、もうすぐ死ぬかもしれないと泣きつく？
だけどそんなことをして、どうなるんだろう。

あたしだったら、他人のそんな話なんか聞きたくない。死ぬなら勝手に死んで欲しい。

いくら親しい者同士でも、そんなことを言われたらきつと、上辺だけの言葉で元気づけるフリをするしかないんだ。

なのに言われた方の気持ちも考えず、自分が不幸で悲しいからって1人で勝手に泣き喚く。

そんな悲劇のヒロインぶった存在に自分になるなんて、美佳はまっぴらだった。

だとしたら病気のことは伏せて、大学に行くためにAV女優をしているということをお話そうか。

そしたら青年は、あたしが夢を叶えるために体を売ってるだけだった分かってくれるだろうか。他の子達とは違うと思ってくれだろうか。

でも、そんな風に思われたところで何にも解決なんてしない。

あたしは誰かに褒めてもらうために頑張ってるんじゃないんだ。

大学に行って、胸を張って生きられる自分になれなかったら何の意味もない。

そう考え出すと、何を伝えたところで全ては無駄なことなのかもしれないと美佳は思った。

なのに。

その一方で、全部ぶちまけてしまいたい気持ちになっている自分があることに美佳は気づいていた。

頑張ったと褒めてほしい。可哀想だと同情してほしい。

悲劇のヒロインぶってるだとか、弱いヤツだとか思われてもよかった。

ただ全てを伝えて、泣き声を上げて叫びたかった。

強がりたいたいけど、強がりたくない。

どうしたいのか分からないけど、ホントは全部分かってる。

自分で思っていたよりもずっと、あたしは子供だったんだと美佳は思った。

今さらつまらない意地を張ったってどうしようもないだろう。

青年に電話をかけた時点で、あたしの気持ちはもうとっくに決まっていたのだから。

自分にそう言い聞かせ、美佳はゆっくりと口を開いた。

「今からあたしが話すことは、あんたにとって興味が無いことかもしれないし、もしかしたら困らせちゃうようなことかもしれない」

それを聞いた青年は、真剣な表情で深く頷いた。

「興味が無いことでも、困ってしまうようなことでも全部聞きます。たぶん俺は、そのためにここに来たんだと思うから」

いきなりこんなことを言われても意味が分からないに違いないのに、そんな風に言ってくれる青年の態度が嬉しかった。

弱々しいイメージしかなかった青年のその力強い言葉を聞いて、美佳の気持ちも少し落ち着く。

「分かった。じゃあ、ちょっと長くなるかもしれないけど我慢して聞いててね」

そうして、美佳の身の上話が始まった。

小さい頃の自分のこと、母親のこと、何人いるか分からない父親の

こと。

文学小説に出会い、大学に行くことと決意したこと。
そのためには、AV女優になるしかなかったこと――。

その1つ1つを、青年は真面目に聞いてくれた。

始めは少し自分のことを話すのに抵抗があつた美佳も、頷きながら黙って聞いてくれる青年の姿を見ると、いつの間にかそんな気持ちはどこかに消えていた。

残るは、病気の話だけ。

話し続けて乾いた口の中をミルクティーで潤し、小さく深呼吸する。
そしてわざと明るめの調子で、美佳は言った。

「まあここまでで、あたしがAV女優なんてやってる理由は分かってもらえた？」

「はい。大学に行くため――ですよね」

青年が相槌を打つ。

「そうそう。でもちよっと、困ったことが起きたんだ」

「困ったこと、ですか？」

重々しい言い方になってしまわないように、あっけらかんと言おう
と思った。

本当は怖いけど、泣きたいけど、なんであたしだけがこんな目にあ
わなきゃいけないんだって叫びたかったけど、美佳はそれを我慢し
た。

そうしたい気持ちよりも、不幸自慢みたいにはなりたくないという

気持ちの方が大きかった。

そして何より、目の前にいるこの青年をあまり困らせたくはなかった。

「うん、実は病気になっちゃったんだよね」

それを聞いた途端、青年が目を丸くする。

「え！　だ、大丈夫なんですか？　なんて病気です？」

「別にそこまで大げさなもんじゃないって。白血病とかいうヤツなだけでさ」

我ながら、上手くさりとらえたと思った。

白血病とかいうヤツ。うん。

自分で言っておきながら、美佳はその言い方に感動した。

そんな風に言くと、なんだかそれがすごく弱っちい病気のように思えてくるのだ。

だから、こんなこと軽く聞き流して欲しい。

それなのに、青年がぐくりと息を飲む音が聞こえた。目を見開き、顔面も蒼白になっている。

やだな。あたしがホントに伝えたいのは、そんなことじゃないんだよ。

なのに、そんな顔しないで欲しい。

「だからー、そんな大げさなもんじゃないって。それにさ、あたしはあんたに病気にかかったことを慰めて欲しくてこんなことを言ってるわけじゃないんだ」

青年に向かって、美佳は苦笑する。
精一杯の苦笑いをする。

「ただね、もしもさ。もしもね——」

弱い自分が、顔を覗かせようとする。
それを美佳は懸命に堪えた。

「もし、万が一、病気のせいで今死んじゃったとしたらさ——」

声が震えているのが自分でも分かった。

だけど、泣かない。決して泣いたりしない。

1人で勝手に死ぬことを想像して勝手に泣いて、そんなの頭にお花畑が広がっているようなバカな女のことだ。

あたしの病気は、白血病とかいうヤツだ。別に大した病気じゃない。だから泣くなんて、絶対にしない。

「今死んじゃったらあたしは、AV女優みたいなつまらない仕事をしてただけの存在になっちゃうんだよ。せつかく生まれてきたのに、体を売って毎日生きてただけの何もない空っぽなやつになっちゃうんだよ——。あたしは人間なのに……他のみんなと同じ人間なのに……だから……それが……すごく、嫌だ……」

言い切って、美佳は押し黙る。

部屋の中を、再び静寂が支配した。

別に、嫌だということ伝えて何か言葉をかけて欲しいわけではなかった。

ただ、この青年には知って欲しかったのだ。

自分が真つ当に生きようとしていたことを。

青年がどう思ったかは分からない。だけど、聞いてくれただけで十分だった。

だから美佳は無理やりに笑顔を作り、「はい、おしまい」とふざけた調子で青年に向かって言った。

しかし彼は、その言葉を聞いているのかいないのか、何かを考えるかのような表情で床の一点を見つめている。

そして意を決したように正面を向くと、美佳の目を見据え、口を開いた。

「前にも言ったかもしれないですけど――」

「え？」

今まで黙っていたのに突然話し始めた青年に戸惑い、美佳は間の抜けた声で返事をしてしまう。

「俺は、芸術的なものが好きです」

「あ、うん。言ってたね」

なぜいきなり青年がこんなことを話し始めたのか、意味がよく分からなかった。

少なくとも美佳には、自分の病気にも、死んでしまいかもしれないことにも、それはまるで関係の無いことのように思えたからだ。

そんな美佳の様子に気づいたのか、「まあ聞いてください」と言つて、青年は続けた。

「幼い頃から俺は、将来は絶対に芸術家になりたいと思っていました。人を感動させられるような芸術品を作ることによって、自分という存在を表現したい。それが俺の夢でした」

「うん」

なんだかいつもとは違った青年の雰囲気、美佳は少し圧倒される。

「美佳さんの好きな文学も、芸術の1つです。人間が、自分の中に抱えている様々な想いを文章にして表現する——」

「うん、そうだね」

「だから俺は、芸術と呼ばれているものは何でも勉強しました。絵画、書道、音楽、彫刻、映画……もちろん文学もです。その中で、自分が表現したいものを一番うまく形に出来そうなことを一生の仕事にしたいと思いました」

その言葉に、美佳は少し驚く。

芸術が好きだということは聞いたことがあったが、彼がそこまで本格的に勉強していたとは知らなかった。

「でもそれだけ色々なものに手を出しても、俺には自分にぴったりのものが見つけれなかった。自分の中にあるドロドロとした感情を表現するには、どれも何かが少し足りないような気がして仕方なかったんです。だから、俺は思いました。それならば、今は芸術とは認められていないけれど、人の心を動かさしめる表現方法で自分で見つけたらいいんじゃないかって」

「え、まさかそれが——？」

「そうです。試行錯誤の末、俺が行きついた答えはアダルトビデオでした」

真剣な表情を崩さず、青年は言った。

アダルトビデオが芸術……？

突拍子も無いその理論に呆れてしまい、美佳は思わず反論する。

「だってさ、AVだよ。セックスしてるところを撮ってるだけだよ。ストーリーがあっても、陳腐としか言えない様なものがほとんどだし。そんなのあたしは、芸術だなんて認められないよ」

「ええ。俺だって初めはそう思いましたよ。性的な表現は芸術には不可欠だと考えていた俺は、アダルトビデオを何本も見てもその中に芸術性を見出そうとしました。だけど、どれもこれもただ性行為を撮っているだけのものに過ぎなかった」

「ほらね。やっぱり」

「だけど、そんな時です。俺が、あなたの出演している作品を見たのは」

「え——？ あ、あたし？？」

まさか突然自分のことを言われるとは思っていなかったため、美佳は動揺してしまう。

あたしの……作品……？

「あなたは性行為中も精液をかけられているときも、いつも溢れんばかりの笑顔を浮かべていた。なのに、なぜか分からないけど、そ

の笑顔がすごく哀しいんです。演技が下手だからとかじゃない。いや、少なくとも俺には、それはとても演技には見えなかった。心から笑っているんですよ。だけど、すごく哀しい顔をしているんです」

ドキリとする。

心からの笑顔――。

それは美佳が、いつも肝に銘じていたことだった。

自分のことを人形と思え――。あたしの嫌いな言葉。なんとなくこんな仕事をしてしまっている他の子たちとあたしは違う。

あたしは楽しんでた。輝かしいフィールドに向かうためのステップを。そして心から、笑っていた。そのはずだった。

なのにその笑顔が、すごく哀しいと青年は言う。

美佳はまるで、心を見透かされたような気がした。

本当は、ずっと分かっていたのだ。

誰よりもあたしは、AV女優という仕事を嫌っていた。見下していた。

あたしにとってそれは、大学に行くための単なる手段。

そんなものを本当に、心から楽しめるわけなんてあるはずがない。ただ将来の自分の姿だけを頭の中に思い描いて、必死に耐えていた。きっと、誰よりも自分を人形だと思っていたのはあたしだったんだ。それを全部、見抜かれていた――。

「それを見た時、俺は魂を揺さぶられるような衝撃を受けました。その顔は、今までどんな名女優も俺に見せてくれたことのない物だった。アダルトビデオなのですよ。なんてたかがアダルトビデオで、こんなすごいものが見れるんだろう。それが、その時の俺の正

直な気持ちでした。だけど、しばらくしてから気づいたんです。きっとそれは、アダルトビデオだからなのだと。セックスという、人が動物に還る瞬間だからこんな真に迫る表情が出来るのだと。そう思っただけです」

さらに青年は続ける。

「そんなアダルトビデオでしか表現できないものを突き詰めていけば、きっとそれは芸術作品となりうる。あなたの哀しい笑顔を見ながら、俺はそう確信しました。そしていつかは、アダルトビデオのに見た人が感動してしまうようなものを作りたい。それが今の俺の夢です。だから俺は、この仕事に誇りを持ってやっています」

誇り――。

あたしにとつては耐えるものでしかなかったアダルトビデオの仕事に、青年は誇りを感じている。

そんな風に胸を張って言える彼が、美佳にはなぜかとても輝いて見えた。だけ。

「あたしには、この仕事に誇りなんて感じられないよ……」

力無い声で、ポツリと美佳は呟く。

そんな美佳に、青年は言った。

「もちろんそれは俺の個人的な価値観です。それを押し付けたりはしません。だけど、1つだけお願いしたいことがあるんです」

「お願いしたいこと……？」

「ええ」

再び青年が、真っ直ぐに美佳を見つめる。
世の中のことなんて何も知らない苦労知らずのお坊ちゃんだと思っ
ていたその青年の瞳が、今はまるで、全てを見透かす魔力を秘めて
いるかのように思えた。

「空っぽだなんて、思わないでください」

まるで哀願するように、青年は言った。

「今死んでしまったとしても、あなたは絶対に空っぽなんかじゃな
いです。だって俺を、感動させてくれたんですから。何かをやりた
いのに、何をしたらいいのかが分からなかったあの頃の俺にとって、
あなたは道標だった」

力強く、一言一言を噛み締めながら。

「あなたにとつてはくだらない、嫌な仕事だったかもしれない。だ
けどあなたがいたおかげで、俺は夢を持つことが出来ました。生き
ていく目標が出来ました。だから、せめて胸を張っていてください。
1人の男の人生を変えてやったんだって。もしあなたのことを、つ
まらない生き方の女だったなんて言うヤツがいたら俺がぶっ倒して
やります。そう出来るように、強くなります。だから、俺のために
も、お願いだから空っぽだなんていわないでください。あなたが生
まれてきたことは、絶対に無駄じゃなかった。無駄なんて、そんな
ことあるわけがない……！」

いつの間にか青年は、両目からぽろぽろと涙を零していた。
あたしが我慢してるのに、なんで先に泣いちゃうんだろう。

情けなくて、弱々しくて、すごくカッコ悪いヤツだと思った。

なのになぜか美佳は、そんな青年が無性に愛しくてたまらなかった。

「バカみたい……」

声を震わせながら、美佳は呟く。

「俺のために胸を張れって、なによそのむちゃくちゃな言い種は。大体さ、死んじゃうかもしれない病氣にかかってる人に、『今死んでしまったとしても』なんて普通言う？」

それを聞いて青年は、「あ！」と口を大きく開けたまま固まった。そして、「す、すいません！ 無神経でしたすいません！」と何度も何度も頭を下げる。

やっぱり気付いてさえないなかったんだ。

きつと青年は、自分の心の中を余さず伝えることに一生懸命で、氣遣ったり慰めたりなんてことを考えている余裕など全然持てなかったのだろう。

その不器用な実直さが、美佳は嬉しかった。

今こんなにもいい気持ちでいられるのは、きつとそのおかげだから。

「それに何、AVが芸術だって。さっきも言ったけど、そんなの絶対無理だよ。あんた他の人にそんなこと言ったら、頭おかしいんじゃないかって思われちゃうよ」

すると、美佳に向けて深々と下げていた頭を上げて、泣き腫らした目のまま青年はきつぱりと言った。

「今は確かにそうかもしれませんが。だけど、そうならないように俺

がするんです。AVだけど感動できる作品もあるんだ、って見てる人に思わせることの出来るようなものを作ります。そうしたらきっと、世の中の見方だって変わってくるはずですよ」

「出来るわけないって」

「出来ますよ！」

「出来ない」

「出来ます！」

「ホントに？」

「ホントです！」

その言葉に、美佳は「ふ〜ん」と頷いてみせる。まったく、変なヤツだと思う。

けどあたしもちよつと変だから、きつとお互い様なんだろう。

「じゃあさ——」

まだ潤んでいる青年の目を覗き込んで、美佳は言った。

「あたしもそれ、手伝ってあげる」

「え……？」

呆けたような顔をして、青年がこちらを見ていた。その間抜けヅラがおかしくて思わず吹き出しそうになりながら、美

佳は言う。

「勘違いしないでよ。AV女優として骨を埋める気になったわけじゃないからね。あたしは病気なんかやつつけて、大学に行く。あたしにとつての夢は、大学に行つて勉強することだもん」

「え、ええ。もちろんそうです」

「だけど、もしも奇跡的に万が一、あたしが大学に行く前に死んじやつたとしてもさ。あんだのその汚い泣き顔に免じて、自分が空っぽだとか言うのはやめにしてあげる。AV女優として生きた日々は、決して否定しない」

「き、汚いつて……い、いえ、ありがとうございます！」

青年のその言葉に、美佳はクスツと笑う。

「だから、あんたが言うような人の心を打つものが本当に作れるのなら、あたしもそれに協力する。いつの日かあたしが、胸を張つて、誇りを持って、自分はAV女優だったって言えるようになるためにもね」

顔をぐしゃぐしゃにして、青年は何度も深く頷いた。

あたしより年上のくせして、ホントに泣き虫なヤツだ。

あたしのことを悪く言うヤツがいたらぶっ倒すなんて言つてた時はちよつとカッコいいかもしれないと思つたのに、こんなに弱々しい姿ばかり見せられていたら少し不安になつてしまふ。

だけどその泣き顔を見ていると自分もつられそうになつてしまい、

美佳は青年をからかうことで気持ちを紛らわせることにした。

「まったく、泣きすぎだよあんた。坊ちゃんの次は、泣き虫男優ってあだなにしちゃうよ」

「ぼ、坊ちゃん？ 俺って、そんな風に呼ばれてたんですか？」

「うん。だってあたし、あんたの名前知らないんだもん」

悪びれずに、美佳は言った。

それを聞いて青年が、「あ、あれ、俺、初めて会話したとき自己紹介しませんでしたっけ？」と慌てる。

「自己紹介どころか、初めて喋った時はあんたすごい緊張しててまともな会話にならなかったよ」

その言葉を聞いて、青年は耳まで顔を赤らめる。

きつと自分でも今まで気がついていなかったんだろう。

まあ、あたしみたいな美人を前にしたら無理もない。美佳はそう納得して、許してあげることにした。

「じゃあ今さらですが、改めて……。俺は、玄って言います。鴻巢玄」

「ふーん。このすげん、か。鴻巢玄。うん、ちょっと変わってるけどいい名前じゃん」

頭の中で、美佳は素早く2つの言葉を組み合わせる。

鴻巢。美佳。

鴻巢美佳。うん、まあ悪くないかな。

そんなことをしている自分がすごくバカみたいに思えた。
なのに、そのバカさ加減が今はなんだかとても心地がいい。

「ちなみにあたしの名前は、美佳だよ。山根美佳」

それを聞いた青年が、「え？」と不思議そうな顔をする。

「バカね、何驚いてんのよ。夢宮綾音なんてご大層な名前、本名なわけないでしょ」

白い歯をのぞかせて、美佳は悪戯が成功した子供のように声を立てて笑った。

第十四話

再生を終え、デッキの中でDVDの回転がゆっくりと止まる。

暗転してもう何も映らなくなった液晶テレビの画面を見つめたまま、

「すごいね……」と美佳が呟いた。

「すごいね、これ」

今度は寿幸の方を振り返り、興奮を隠し切れない様子で繰り返す。
そんな美佳の反応に、寿幸はほっと胸を撫で下ろした。

そして心の中で、改めて「大空を泳ぐ魚」という作品に感謝する。

「すごかったですか？」

寿幸が尋ねると、美佳は大きく頷いた。

「うん。だって今まではあたしね、友達の女優の出てるAVとか見ても、気持ちが悪いつて思うだけだった。まあ、レズじゃないんだし当たり前と言えば当たり前なんだけどさ。なのに、この人——夢宮綾音さんだっけ——のエッチは、見ても全然嫌な気がしないんだ。きれいで、輝いてて、自分でも不思議なくらい見入ってた」

勢い込んで言う美佳の言葉が嬉しかった。

一面に広がる草原よりも、その中央にぽつんとそびえ立つ真っ白な家よりも、美佳は夢宮綾音のセックスシーンに感銘を受けたのだ。
やはりこの作品を見てもらって良かった、と寿幸は思った。

「俺が言ったAVで感動するってことの意味、分かってもらえました？」

「うん。なんだかすごいドキドキしてるし、たぶんあたし、感動してるんだと思う。だけど――」

少し声のトーンを落として、美佳が言った。

「この仕事に誇りを持つってことは、やっぱり出来ないかな……」

「そう、ですか……」

たとえ自分と同じ感動を美佳が味わったとしても、だからといってAV女優という仕事を続ける気になるかどうかはまた別問題だ。最初から分かっていたことだったが、実際にそう言われると少し氣落ちしてしまう。

だが、結局は美佳自身が決めることだ。これ以上自分が何か言うべきではない。

悔しいけれど、寿幸はそうやって自分を納得させることにした。

「けどね、1つ分かったこともあるんだ」

「え？」

「今はあたしにはこの仕事に誇りは持てない。だけど、持てるようにすることも出来るんだって」

意味が分かりにくい言い回しに、寿幸は少し戸惑う。

けれど、決してネガティブではないその表現に、寿幸はまだ望みが完全に絶たれたわけではないことを感じた。

「つまり、どういう意味ですか？」

「うーん、あんまりうまくは言えないんだけどさ」

そう言っただけで、すっかり冷めてしまったコーヒーを口に含む。いつの間にか日は落ちて、部屋の中は暗闇に包まれていた。

「あたしは今、こんな仕事をしてるって親や友達には言えない。だってそんなこと言ったら、きっと怒られたり引かれたりするって分かってるからさ」

「まあ、そうですね。その通りだと思います」

「だけども。それがもし、有名な画家の描く絵のヌードモデルの仕事だったならどうだろう、って思ったんだ。たぶんそれならあたしは、みんなに言うと思うんだよね。ううん、言うどころか自慢するかもしれない。これ、あたしを描いてるんだよってその絵を見せびらかして。みんなだってたぶん、すごいすごいって言うと思う」

それを聞いた瞬間寿幸は、美佳が何を言わんとしているかに気がついた。

「上手い例えが思いつかないからあんまりよく分からないかもしれないけど、あたしが言いたいのはそういうこと。つまりね、結局は人……っていうか、世の中の見方だと思うんだ。きっとそのヌードの絵だって、有名な画家じゃなくてそこらへんの素人のお兄さんに描かれたんだとしたら、みんな嫌な顔したと思う。不思議だよ、同じ裸を晒す仕事なのにさ」

分からなくなかなかつた。痛いほどよく分かった。なぜならそれこそまさに、寿幸自身が常日頃から思っていたことだ

からだ。

「だから、思うんだ。みんなの見方を変えちゃうくらい感動できる『大空を泳ぐ魚』みたいな作品がいっぱいＡＶ業界にあったとしたら、もしかしたらそんな偏見もなくなるんじゃないかって。素人のお兄さんが売れっ子の超有名の画家になったら、昔書いてたヌードの絵がみんなに芸術だってもてはやされたりするみたいだね」

「ええ……俺もそう思います。本当に、そう思いますよ」

「うん。だからね、あたしが誇りを持ってこの仕事を出来るようになるためにも、次に撮るのはそんな作品にしたいんだ」

「へ——？」

次の作品……？

思いもかけない言葉だった。

「え……美佳さん、もうこの仕事を辞めちゃうんじゃないんですか……？」

「えー？ あたし別にそんなこと言ってないけど？ 何勝手に勘違いしちゃってんのあんた」

ニヤニヤと笑みを浮かべている美佳の顔を見て、寿幸は謀られたことに気がついた。

きつと美佳は、「大空を泳ぐ魚」を見終えた時からもう決めていたのだ。

自分が誇りを持てるようになるものを作っていくことで、この仕事を続けていくという道を選択することを。

「ひ、ひどいですよ。俺は真剣だったのに」

抗議する寿幸の唇に人差し指を押し当て、「ただし」と美佳は言った。

「1つだけ条件があります」

急に改まった口調で告げる美佳に、寿幸はドキリとする。
条件？ それって一体どんな……？

「その作品の男優は、あんたにやって欲しいんだ」

バカな？！

予想だにしていなかった美佳の言葉に、寿幸は驚きのあまり床から飛び上がった。

「む、無理ですよそんなの！ 俺みたいな新人が、美佳さんみたいな売れっ子の本番男優なんて務められるわけがないじゃないですか！」

「大丈夫だって。あたしからも監督とか事務所の人に頼んであげるからさ。そしたらなんとかなるでしょ」

「いや、無理ですってどう考えても……」

「なんです。『大空を泳ぐ魚』の男優だってあんたと同じ年くらいだったじゃん。あれがおっさんだったら、正直あたしはここまで感動なんてしなかったと思うよ。あの若い2人の瑞々しいパワー？ みたいなのが伝わってきたからこそ、心に響いたんだし」

「それはそうかもしれませんが……でもですね……」

困り果てて言う寿幸に業を煮やしたのか、美佳は無慈悲な言葉を投げつける。

「じゃあいい。やっぱりあたし仕事やめる」

そ、そんな。

せつかく仕事を続ける気になっている美佳の気持ちを、自分のせいで萎えさせてしまうのは避けなければならなかった。

だけど、いまだ本番男優なんて一度もしたことがない自分にそんな大役が務まる自信もない。

ジレンマに押し潰されてしまいそうになって頭を抱えている寿幸に、少し真剣なトーンで美佳が言った。

「ねえ」

「は、はい」

「あんだだっで、みんなが誇りを持って仕事が出来るとな業界に変えたいんでしょ？ 2人で一緒に作るうよ、そういう作品を——」

そんな美佳の言葉に抗う術など、寿幸は持ち合わせていなかった。腹をくくり、言う。

「分かりました……。じゃあ、よろしくお願いします」

「うんうん、よきにはからえ」

満足げな美佳の笑顔が眩しい。

結果的にはこれで良かったのだ。

美佳が仕事を辞めなくて済んだし、何よりこの笑顔を守ることが出来た。

ただど寿幸には、1つだけ、どうしても伝えておく必要のあることがあった。

「その、やるからには俺も精一杯やります。美佳さんが言うような作品を、俺だって作り上げたいし……。た、ただですね」

「うん？」

「そ、その……本番が、ですね……下手でも、怒らないでくださいね……」

それを聞いた美佳が、妖しい笑顔を浮かべる。

「うーん、それはちょっと困るなあ。じゃあ、今から練習しようかし？」

日の落ちた暗い部屋に、2人きりの若い男女。

考えてみれば、これ以上とないシチュエーションだった。

だが寿幸は慌てて首を振り、ごまかすように言った。

「だ、ダメですよ！俺はお見舞いに来ただけなんですから。それより、具体的にはどんなものを作ればいいか少し考えてみませんか？」

強引な話の逸らし方だったが、美佳はその話題に興味を持ったらしい。

にこりと微笑んで、得意げに答えた。

「実はさ、もうアイディアはあるんだよね。さっき『大空を泳ぐ魚』を見ている最中に思いついたんだけど」

「え、ホントですか？　どういのですか？」

「うん、『大空を泳ぐ魚』のオマージュっていうの？　そういうやつを意識してるんだけどさ。タイトルはね——」

一呼吸置いて、美佳が言った。

「深海を翔ぶ鳥」

第十五話

「綾音さん、サンプル版が出来上がりましたよ」

息を切らせて、青年——鴻巣玄が病室に駆け込んでくる。
ベッドから上半身を起こし、美佳はそれを出迎えた。

「お、すごいね。もう出来たんだ。思ったよりだいぶ早かったじゃん」

「ええ。なにしろ、スタッフの人たちはみんな徹夜で編集作業をしてたみたいですから」

そう言う玄の目の下にも、ぼつこりと深いクマが出来ていた。
きっと、サンプル版の一刻も早い完成のために誰よりも尽力してくれたのは、他ならぬ彼自身なのだろう。

美佳は心の中で小さく、「ありがと」と感謝の言葉を呟いた。

「ま、サンプルが上がるよりも先に主演女優が死んじゃったらシャレにならないもんね」

するとそれを聞いた玄が、困ったような顔をする。

「バカね、冗談よ。死なない自信があるからこそ、こんなこと言えるんでしょ」

その言葉がただの強がりでしかないことは、美佳自身が一番良く分かっていた。

入院してからまだ2週間しか経っていないのに、理想的な肉付きを

していた自慢の体は随分と痩せこけ、あばら骨が浮き出るほどになっていた。

だけど、死なない。

たとえ強がりになしか過ぎないとしても、何度でも言おう。あたしは死なない。

それが美佳の信念だった。

気持ちで負けたら、心まで病魔に蝕まれてしまう。

絶対に、負けない――。

ともすれば弱気になりそうな自分をそうやって戒めながら、美佳は病氣と闘っていた。

「まあそれより、せつかく持ってきてくれたんだから早く見せてよ」

「あ、はい」

美佳が言つと、玄は持参したビデオデッキを病室のテレビに手際良く接続した。

そして、「サンプル版」とラベルに書かれたビデオテープをデッキにセットする。

そんな玄の姿を見ているうちに美佳は、段々と緊張してくるのを感じていた。

無理もない。なにしろ、自分が出演しているビデオをちゃんと見るのは実は初めての経験なのだ。

準備が終わったのか、玄はベッドの横にあるパイプ椅子に腰をかけ、リモコンでビデオデッキを操作する。

「それじゃ、再生しますよ――」

しばらくの暗転ののち、病室の小さなテレビの画面いっぱい、どこまでも続く草原の風景が広がった。

今から約1ヶ月ほど前。

玄に、自分が白血病であることを告白したあの日。遅すぎる自己紹介を終えた2人はその後、どのような作品を作るのかについて話し合っていた。

「大空を泳ぐ魚、ですか？」

「そ」

玄と話しているうちに、美佳が瞬間的に頭に閃いたタイトルがそれだった。

「それって、どういう意味が込められてるんです？」

「うーん。一言で言うと、固定観念を覆すってことかな」

美佳の言葉に、玄は「なるほど」と頷く。

「まさに俺たちがやろうとしていることですね」

「そうそう。あと、海の中から遙か大空を仰ぎ見る魚が、いつかあそこで泳いでやるんだって言って必死に水面で飛び跳ねてる様なイメージも込めてるつもり」

「その魚に、アダルトビデオに対する固定観念を覆そうと挑戦している俺たちの姿を重ねてるってことですか？」

玄が言うと、美佳は腕を組んで「うーん」と唸った。

「もちろんその意味もあるよ。だけどそれだけじゃなくて、本来の『魚』としてのイメージでも捉えて欲しいんだ」

「と言いますと……？」

「ホントそのまんまだよ。空を泳ぐことを夢見てる魚。その魚はね、頭上に広がる空という雄大なフィールドを泳ぐ自分の姿を想像しているうちに、深い水の底にすることがバカらしくなっちゃうの。でもね、あたしは思うんだ。確かに魚にとって、空は光り輝く場所に見えたかもしれない。今の自分に物足りなさを感じてしまったかもしれない。けどやっぱり、魚は海で泳いでる姿がきつと一番煌いてるんじゃないかって」

「つまり、自分を安易に否定するんじゃないくて、今出来ることに価値を見出せるようになるうってことですか」

それを聞いて、満足げに美佳が微笑む。

「そういうこと。海の中にだって光は届くんだよ」

得意そうに言っではみたものの、なんてことはない。自分を、空っぽだなんて思うな――。

それはついさっき、玄が教えてくれたことだった。

「じゃあ、それら3つの意味を含めて『大空を泳ぐ魚』なわけですよ」

ね」

「うん。我ながらちょっと子供っぽい発想だと思うし、AVには全然そぐわないタイトルかもしれないけど、あたしはこれ、気に入った」

「いいんじゃないですか。俺も好きですよ。即興で思いついたわりには、なかなか深いと思いますし」

素直に誉められ、美佳は少し照れる。

それがバレるのが嫌で、わざとぶっきらぼうに美佳は言った。

「じゃあ、ここから先は鴻巣の仕事だよ」

「え？」

「あたしはタイトルを考えた。あとはあんたが、今あたしが言ったことを見ている人に伝えられるようなシナリオと演出を考えて、3日以内に台本書いてね。もちろん、映画じゃなくてアダルトビデオを作るんだから、そこのもお忘れなく」

「た、たった3日しかくれないんですか?!」

玄が、悲鳴に近い声を上げる。

確かに3日で作れというのは酷かもしれない。玄の気持ちは十分に良く分かった。

だけど、だけど仕方ないんだよ。

あたしだって本当は、もっと時間をかけてあんたと一緒にすごい物を作りたいんだ。

それは、美佳の偽らざる気持ちだった。でも、あたしにはもう――。

「あんまり時間がないんだ」

「え……？」

「言ってなかったけどさ、あたし、あと2週間経ったら入院しなきゃいけないんだよね」

そこからの2週間はまさに激動の日々だった。

正直言つて、体のことを考えるととても正しい行動だったとは言えないだろう。

だが美佳は、今だからこそやりたかった。

今を逃すと、もう永遠にその機会が失われるかもしれないことを分かっていたから。

そのことで、まず玄を説得するのが大変だった。

それまでは、病名を言っただけで具体的な現状を伝えていなかったため、まだそこまで深刻な状態だとは思っていなかったのだろう。

2週間後に入院すると言った途端、玄は「絶対に今は仕事をしなきゃダメです」の一点張りになってしまった。

今しか機会はないかもしれない、と言うと、

「なぜですか。死ぬ気なんですか綾音さんは？ さつき俺に、病気はやつつけるって啖呵を切ったばかりじゃないですか。撮影なんてその後でいくらでも出来ます。だから今は、ちゃんと治すことだけ考えてください。俺はいくらでも待ちますから」

と有無を言わず言い切られ、正直困り果てた。

「そういう意味じゃなくて、今から入院したら退院できる頃にはもうきつと秋だよ。そしたら入試まであと少しだから勉強以外のことなんてやってる暇がなくなる思うし、病気が治るとか治らないとか関係なく、あたしにとって今がＡＶ女優っていう仕事をやれる最後の機会なの。分かってよ」

考えに考え抜いた言い訳を美佳がする頃には、玄もだいぶ気持ちが落ち着いたのだろうか。

体のことを最優先に考えるという条件で、渋々折れてくれた。玄がそこまで強硬な態度を取るとは思っていなかったため驚いたが、自分のことを真剣に心配してくれていることが分かって美佳は素直に嬉しかった。

撮影会社のスタッフや事務所の人たちにもだいぶ迷惑をかけた。

何しろ、突然白血病だと言い出すわ、なのに2週間で新作を1本作りたいなどともんでもないことを言うわ、冷静に考えるとメチャクチャだったと思う。

だけど、もしかしたら美佳に未来がないかもしれないということを、口には出さなくても「白血病」という病名だけで彼らも感づいたのだろう。

新人の男優を本番男優に指名するどころか、その男優が書いた脚本で撮りたいというわがままさえも、すんなりと受け入れてくれた。

自分は1人だ。ずっと美佳はそう思っていた。

だけど、内心では見下し続けていたＡＶ業界の人たちがこんなにも親身になってくれるのを見て、美佳は自分がいかに子供だったのか

ということに改めて気がついた。

遅すぎたかもしれないけれど、気付くことが出来て良かったと心から思った。

そしてやはり、美佳が誰よりも感謝しなければいけないのは玄だろう。

美佳に負担をかけさせまいとしたのだろうか。

3日の約束だったのに、徹夜してわずか1日で台本を仕上げてきてくれた。

「制作期間が短いからって、手抜きってことはありませんから！」

玄のその言葉通り、簡潔なプロットながら自分が言ったことを全て詰め込んでくれてあり、素晴らしいシナリオだと美佳は思った。

さらに玄は、舞台のイメージにぴったりの場所も恐るべき短期間で調べ上げてきてくれた。

たった1週間で撮影が出来る状態を整えられたのも、彼の力によるところがだいぶん大きい。

そんな玄やスタッフたちに恩を返すためにも、そして何よりも、夢宮綾音という女優が生きた証を残すために、美佳は最高の作品を撮影出来る様にしようと改めて自分を奮い立たせた。

もうすぐ尽きてしまうかもしれない命の灯火。その儚い炎の煌きを、人々の心を揺さぶるメッセージへと変えて。

そして美佳の、最後の撮影が始まった――。

病室の窓から差し込む西日が眩しい。

最後まで再生を終えたテープが、キュルキュルと音を立ててデッキの中で巻き戻される。

「どうでした？」

恐る恐る、と言った感じで玄が尋ねた。

きつと不安なのだろう。自分が台本を書いて男優をした作品を、初めて人前で上映したのだ。

たとえその相手が一緒に作品を作り上げた美佳だとしても、玄にとつては、その気持ちは変わらないのだと思う。

「うん」

そんな玄に、美佳は静かに答えた。

「たぶんさ——」

真剣な表情を崩さないまま、美佳は言う。

「天才だよ、あたしたち」

「え？」

冗談めかした言い方だったけど、本気だった。たぶん、自分たちは天才なのだと思う。

でないと、説明がつかなかったから。

今、自分が泣いてしまっていることの理由が。

とめどなく溢れてくる涙が信じられなかった。

なんで。なんでだろう。

なんであたし、自分が出てるＡＶを見て泣いちゃってるんだろう。

だけど、小さなテレビのブラウン管の中にはあたしが――夢宮綾音である山根美佳が生きていた。

命の炎を燃やして。

玄の体にしがみつき、獣のような喘ぎ声をあげながら確かにあたしはそこにいた。

きっとこの先自分が死んでしまっても、誰かが「大空を泳ぐ魚」という作品を見る限り、あたしは生き続けることが出来るんだ。

胸を張って。誇りを持って。

それが美佳は、何よりも嬉しかった。

嬉しくて、嬉しくて、どうしても涙が止められなかった。

突然泣き出した美佳に驚き、玄がおろおろと慌てふためく。

「だ、大丈夫ですか綾音さん……？」

それには答えず、美佳は言った。

「ねえ、鴻巣」

「は、はい」

「約束して――」

「え？」

「もしこの先あたしがいなくなっちゃったとしても、あんたは人の心を動かす物を作り続けていくって」

美香の言わんとすることを一瞬で理解したのだろう。
神妙な顔で、玄はただ深く頷いた。

「じゃあ俺、そろそろおいとまします」

しばらくした後、パイプ椅子から立ち上がって玄が言った。

「あれ、ビデオデッキ持って帰らないの？」

「それは俺からのプレゼントです。また暇な時にでも、『大空を泳ぐ魚』を見てください。今度は、他のビデオも持ってきますんで」

「分かった。ありがとう」

ドアの方に向かう玄の姿を、美佳は黙って見送る。
いつの間にか日は沈み、窓の外には夜の帳がおりていた。

「それじゃ、また近いうちに来ます」

「うん、待ってるね」

軽く挙げた手を、「バイバイ」と左右に振る。

そのたびに、腕から生えた点滴の管が揺れるのが痛々しかった。

1人残された夜の病室で、美佳はもう一度「大空を泳ぐ魚」を再生した。

純白のワンピースを着た少女が画面に現れ、美佳はほっと安堵のため息をつく。

大丈夫。“あたし”はちゃんとここにいる――。

テレビから聞こえる自分の声をBGMに、美佳はゆつくりと参考書のページを捲った。

玄にも言った通り、退院したら外の世界はもうすっかり入試シーズンを迎えていることだろう。

あたしは、死なない。

だけど本当は、どうなるかなんて分からない。

でもさ、ねえ鴻巣。

あたしの人生は、空っぽなんかじゃ無かったよ。誇りを持っていたよ。れたよ。

全部、あんたが教えてくれたこと。

今なら、胸を張って堂々と言える。

あたしは――

山根美佳は――

夢宮綾音だ。

エピローグ

「深海を翔ぶ鳥」の撮影は、7月の第2週目の月曜日から始まった。梅雨が明け、強くなった陽射しがじりじりと肌を灼く。季節はもうすっかり夏だった。

それにしても、「深海を翔ぶ鳥」とはまた、なかなか面白い名前を考えたものだ。

台本の表紙に書かれたタイトルを見ながら、玄は思う。

1カ月半ほど前、寿幸と神藤美佳が自分を訪ねてやってきた。なんでも、次に撮影する作品の監督をやって欲しいのだと言う。

通常この業界で、女優が自ら監督を指定するなどというケースはほとんどない。

事情がよく飲み込めないまま玄が話を聞くと、「大空を泳ぐ魚」のオマー・ジユ作品を撮りたいので、その監督を頼みたいということだった。

なるほど。それならば、玄が「大空を泳ぐ魚」の男優だということを知っている寿幸が、自分に依頼してくるのも頷ける。

2人は、共同で書いたという台本を持参していた。

パラパラと、それを捲って読んでみる。

タイトルと同様、「大空を泳ぐ魚」と対比的な内容にすることを意識したのだろう。

漆黒のドレスに身を包んだ少女が生まれ育った屋敷を飛び出し、光溢れる外の世界で1人の青年と出会うという内容のストーリーだった。

2人の若さが全面的に押し出されており、ところどころに稚拙さも伺える。

だが玄は、監督をやることを快諾した。

「大空を泳ぐ魚」のオマーージュ作を撮るのなら、悪い気はしない。それになにより、まるで20年前の自分と綾音を見ているような気がして、嬉しかった。

撮影3日目の今日は、少女と青年の出会いからセックスまでの各シーンの撮影だった。

野外での撮影が主となるので、照りつける直射日光が出演者やスタッフたちの体力をじわじわと奪う。

玄はタオルを首にかけて、本番に臨んだ。

音声やカメラの準備が終わり、撮影が開始できる態勢が整う。

さて始めるかと思いい出演者たちの方に目をやると、ひどく落ち着かない様子の寿幸の姿が視界に飛び込んできた。

よほど緊張しているのだろう。こちらにまでそれが伝わってくる。

20年前の自分はとうだったのだろう。やはり緊張していたのだろうか。

少し考えてみるが、思い出せない。

どうせ緊張していたに違いないのに、都合の悪いことは忘れてしまう自分の記憶力に玄は苦笑する。

どうだいけるか？と目で問うと、寿幸は無言で頷いた。

とてもいけるようには見えないが、まあいい。

少し緊張しているくらいの方が、青臭さが出てちょうどいいのだと玄は思った。

「じゃあ、本番始めるぞ！」

メガホンを片手に大声を張り上げる。
本番スタートを告げるカチンコの音が、雲ひとつない青空に高く響いた。

「お疲れ様です」

「お疲れ様です」

スタッフが次々と声をかけてくる。

玄はそれに、「おう、お疲れ」と軽く手を挙げて答えながら、機材の片付けの邪魔にならないように人気のないところに移動した。

撮影現場からすぐのところ公園があつたので、これ幸いとベンチに腰かける。

冷えた缶コーヒを喉に流し込むと、この世のものとは思えない格別な味がした。

午前10時から始まった撮影は、午後2時には無事終わった。

昨日までで屋敷内のシーンは全て撮り終えているので、これで撮影の全行程が完了したことになる。

まだ編集作業が残っているが、とりあえずはこれで一段落だ。

心地良い解放感と疲労感に身を任せ、ベンチに腰かけたまま玄は軽く目を閉じる。

そのまま少し眠ってしまったのだろうか。

ふと気がつくと、いつの間にか隣の空いたスペースに誰かが腰かけていた。

「あ、どうも」

玄が目を覚ましたことに気づいたのだろう。
隣にいた人物が声をかけてくる。

「なんだ、お前か。驚かせやがって」

そこにいたのは寿幸だった。
気を抜いていたところを見られてしまったようで、なんだか決まりが悪い。

監督としての威厳を示すためにも、玄はそれっぽいことを言って誤魔化すことにした。

「ああ、その、なんだ。さっきの撮影、なかなか良かったぞ」

玄が言うと、寿幸はぱつと顔を輝かせる。

「本当ですか？　ありがとうございます！　あ、でも——」

「ん？」

「今回は、わがままな願いをしてすいませんでした。突然、監督をして欲しいなんて言っちゃって……」

「なんだ、そのことか。別にいいよ」

20年前の俺たちのわがままに比べたら可愛いもんだ。
心の中で、玄は軽く苦笑する。

「はい、ありがとうございます」と答えると、話すことがなくなつたのだろうか。寿幸が口を閉ざす。

玄も黙った。

ただ、ジリジリと鳴くセミの声だけが辺りに響く。

頭上には、深く青い空が広がっていた。

その中心からは、光のシャワーが燦々と降り注ぐ。

ふと見上げると、1匹の鳥が天空を目指して羽ばたいていた。

その勢いは一向に留まる事を知らない。

まるで、光の中心そのものに辿り着こうとしているかのように。

なんだかその姿がやけに頼もしくて、自然と顔がほころんでしまう。

「なあ、若いの——」

「あ、はい」

「『大空を泳ぐ魚』を、現代に蘇らせてくれてありがとう。礼を言うぜ」

「い、いえ、そんな。お礼を言わせてもらうのは俺たちです。あの作品がなかったら、俺も美佳さんも、きっとこの業界にはいませんでした」

慌てた様子で寿幸が手を振る。

ふっと笑い、玄は缶コーヒーを一口する。

20年前の自分たちの想いが、成ったような気がした。

なあ、綾音——。

確かに俺たちのしていることは、真っ当に生きているヤツらからは見向きもされない様なことなのかもしれない。

だけど、たとえばここが光の届かない深い闇の中なのだとしても、俺

たちは必死に何かをやるうとしている。

だからきつといつか、俺たちはもつと多くの人の心を動かすことが出来ると思うんだ――。

それは昔、1人のAV女優の哀しい笑顔が教えてくれたことだった。

再び空を見上げると、先ほどの鳥がまだ羽ばたいていた。

あいつは、どこまで飛んでいけるのだろう？

だけど、どこへ辿りつくことになったとしても、今あの1羽の鳥は美しいほどに輝いている。

それだけは、揺るぎようのない事実だった。

全身に光を浴びながら、その輝きをじっと見つめる。

太陽が少しだけ眩しすぎて、鴻巣玄は、そっと目を細めた――。

あとがき

皆さんこんにちは。

「闇に蠢く」を最後までお読みいただき、ありがとうございます。

私がこの半ば自伝とも言える小説を書くと思ったのは、夫から聞いたとある話がきっかけでした。

「昔の俺たちにちょっと似てるヤツらがいるんだ」

そう言っただけなのに話す夫の言葉を聞いているうちに、私の頭の中にはどんどんストーリーが出来ていきました。

そして同時に、私はあるイタズラを思いついたのです。

現代の寿幸君と神藤美佳さんのお話と、20年前の私——山根美佳——と玄さんこと鴻巣玄の若かりし日のお話。

その2つの時代のストーリーを、あたかも同じ時間軸上の出来事であるかのように読んでいる人に錯覚させてしまう描き方をし、いよいよというところで種明かしをする。

企みが上手く行ったかどうかは分かりませんが、もし驚いていただけたのなら幸いです。

あれから私は白血病を克服し、無事大学に行くことが出来ました。今は文学を研究する傍ら、たまにこうして小説を書いたりしています。

文学研究者と小説家。誰もが賞賛してくれるこの仕事に、心からの誇りを感じながら生きる日々です。

だけど私は、AV女優であった過去を決して恥じたりはしません。

人に言えば、恐らくは大半の方がぎょつとした顔をするでしょう。それだけで私のことを軽蔑する人も、きっと少なくはないと思います。

それでも私は、胸を張って言えるのです。

20年前のあの頃、私は夢宮綾音でした。

鴻巣玄という青年と出会い、たぶん恋をして、そして2人で作り上げた「大空を泳ぐ魚」。

それらは今でも私の宝物であり、人生のかけがえのない一部なのですから。

今、自分のしていることが誰にも認められなくて、日々鬱屈している方はたくさんいると思います。

けれどあなたがその中で得たものは、何もなかったでしょうか。空っぽだったでしょうか。

私はきつと、そんなことはないと思います。

大切なのは、それに気がつくこと。

そしてそんな自分に、胸を張って誇りを持てるようになること。

そうすれば今いる場所は、きつとあなたにとって輝くフィールドに変わるはずです。

だってそうでしょう？

海の中にも、光は届くのだから。

2008年1月17日 鴻巣 美佳

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9533g/>

ヤミに蠢く

2010年10月10日02時22分発行